

古代の造形

モノづくり日本の原点



古代の造形

—モノづくり日本の原点

平成二十九年九月二十三日(土・祝)～十二月十日(日)

前期…九月二十三日(土・祝)～十月二十九日(日)

後期…十一月三日(金・祝)～十二月十日(日)

宮内庁書陵部
宮内庁三の丸尚蔵館

目次

3	— ごあいさつ
4	— 古代の造形 — 出品資料をとおして
7	— 図版・解説
7	— I 石の造形
29	— II 土の造形
53	— III 金属の造形
81	— IV 守り伝えられたもの
92	— 出品目録
iii	— List of Exhibits
ii	— Foreword

凡例

- 一、本図録は、平成二十九年九月二十三日(土・祝)～十二月十日(日)を会期とする展覧会「古代の造形 — モノづくり日本の原点」の解説図録である。
- 一、本展覧会は、書陵部と三の丸尚蔵館の共催であり、展示資料はそのいずれかが所管するものである。
- 一、会期中、前期・後期で展示替えを行う。各資料の展示期間は、巻末の出品目録に記載している。
- 一、図録掲載の資料に付した出品番号は、展示番号と一致する。
- 一、出品資料名のいくつかについては、近年の研究の進捗状況等を鑑み、従来の当序出版物での名称と異なるものがある。
- 一、出土地については、資料受入れ時の地名のほかに、現在の地名、もしくは公文書等の調査からより詳細な地名情報等が判明した場合は、括弧付で付した。
- 一、資料解説に記載する寸法の単位はcmである。
- 一、本展覧会の企画は、書陵部と三の丸尚蔵館が協力して行い、署名原稿のほか、各資料の解説を次のように分担執筆した。
書陵部 陵墓課 陵墓調査官・徳田誠志(出品番号6～20)、同首席研究官・清喜裕二(1～5、74、86、88～95)、同主任研究官・有馬伸(21～43)、同・加藤一郎(56～73、87)、同研究員・横田真吾(44～55)、同・土屋隆史(75～85)
- 一、本図録掲載の写真は、書陵部保有のフィルム及びデジタル画像、三の丸尚蔵館保有のフィルム及びデジタル画像によるほか、出品番号67の部分拡大写真については、独立行政法人九州国立博物館、出品番号74の部分拡大写真については、独立行政法人奈良文化財研究所から提供を受けた。記して感謝申し上げます。このうち、デジタル画像の撮影については、佐藤右文(アートフォトリソ文)、福島省、佐野順一(以上、株式会社インフォマジュー)による。

宮内庁には、歴代の天皇、皇后をはじめとする皇族方を葬る陵墓等を管理し、調査研究を行う書陵部陵墓課があります。ここでは仁徳天皇陵から出土した「女子頭部」や「馬形埴輪」をはじめとする優れた出土品を多く所蔵しています。その中には、独特の形をした「御物石器」、美しい流水文様が洒落た「流水文銅鐸」、それまでの鏡に独創性を加えて当時の日本の家屋を立体的に表した「家屋文鏡」など、古代の様々な優れた造形表現を示す数々の作例が含まれており、これらは日本文化の基礎期を彩る重要な作品です。一方、昭和天皇まで御物として伝えられていた作品を引き継いだ三の丸尚蔵館には、学術的に貴重な資料と評価される「金銅製四環壺」や類例がほとんど知られていない「金銅装横矧板鉾留衝角付冑」など、注目すべき優品があります。

本展では、こうした書陵部と三の丸尚蔵館が所蔵する考古資料のうち、それらが使用されていた頃の姿を留めた作例を中心に、主に石・土・金属などの素材や製作技法に注目して、その造形的な特徴に焦点をあてて紹介します。

美しい緑色の翡翠の勾玉や、南の海でとれる貝を使った腕輪の特徴を表現した不思議な形の鍔形石や車輪石などの「石の造形」、古代の大らかな精神性を感じさせる埴輪や、巧みな轆轤の技術を用いた須恵器などの「土の造形」、躍動する神獣や複雑な幾何学文様がほどこされた銅鏡や、金色のまばゆい輝きを放つ装身具などの「金属の造形」、それらのいずれもが、わが国の古代の人々の豊かな美意識と造形力を示しています。本展の出品作品にみられる素材と技術・技法が織りなす造形美を通じて、モノづくりの伝統を誇りとしてきた日本文化の古層に注目していただければ幸いです。

平成二十九年九月

宮内庁書陵部
宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵 出品作品一覧 (第78回 古代の造形—モノづくり日本の原点)

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
60	飛禽走獸文鏡		一点	中国・魏 (3世紀)	p. 57
69	瑞獸鏡		一点	中国・宋 (10～13世紀)	p. 64
74	金銅製四環壺		一点	飛鳥～奈良 (7～8世紀)	p. 66-67
86	金銅装横矧板鉾留衝角付冑		一点	古墳時代 (3～7世紀)	p. 77-79
88	発掘品類集 (蒔絵重箱入)		一組	古墳時代ほか	p. 82-88

古代の造形——出品資料をとおして

はじめに

「古代の造形——モノづくり日本の原点」と題した今回の企画展は、三の丸尚蔵館と書陵部が所蔵する考古資料を紹介するものである。書陵部の考古資料は陵墓課が保管を担当しており、陵墓や古墳から出土した副葬品を中心とする資料に優品が多い。これは、明治期以来、太平洋戦争終結まで陵墓の考証業務と密接に関わる形で資料が収集されてきたことを背景としている。その充実した資料は早くから学界にも知られていたことから、外部への貸出を通して各地で紹介される機会が多かった。一方で、三の丸尚蔵館所蔵品は、昭和天皇まで御物として引き継がれていたものであったため、「金銅製四環壺」など一部の作品は展示の機会があったが、その他については、書籍で紹介されることはあっても、実物が紹介される機会は限られていたといつてよい。しかし、出品作品の解説でも述べるように、考古学の資料として重要な一例であるものを多く含んでいる。もとより、すべてを展示することは難しいが、今回は、特に重要なものを中心にして展示することで、いわば宮内庁が所蔵する考古資料の全体像が垣間見えるものとなるだろう。

展示の構成

本展では、各資料がもつ造形に着目して、その特徴が素材や製作技術とどのような関係にあるのか、といった点にも注意して観覧いただきたいと考えて、資料を素材で分けて、「石の造形」「土の造形」「金属の造形」というテーマを設定した。これは、人間が主に道具の素材として利用を始めた順番を意識しており、造形の特徴を示すために、資料もできる限り本来の形態がわかるようなものを選定している。本図録の各テーマにおける出品番号も、製作された順番に沿って付している。

これら各素材は、利用の開始時期は異なるが、新しいものが古いものに取って代わる訳ではなく、順次新たに加わりながら人間の生活を支える基盤ともなってきた関係にある。これは、より入手・加工の難しい素材を利用できる

ようになる生産技術の向上を背景とする歴史でもある。もちろん、用途によっては、その役割を交代したものもある。例えば、刃を備えた道具は石(石器)が担っていたが、金属(青銅器・鉄器)の出現により、ほぼその役割は入れ替わったといえる状況であろう。しかし、石は利器としての役割こそ金属器に譲ったが、翡翠など種類によっては、装身具の素材として金属器が出現する前の縄文時代から、現代にいたるまで確固たる地位を築いていた。出品資料の中に縄文時代の装身具はないが、陵墓や古墳から出土した翡翠製の勾玉などは、石の重要な用途のひとつを示してくれている。

各種の造形

以下、主要な出品資料を紹介しながら各テーマにおける造形の特徴を見ていきたい。

石の造形 石は製品を作ろうとする時に、作ろうとする人物が手元にもっている原材料としての石を、割る・削る・磨くなど、いわばマイナス方向に減らしながら製作していく。当然、途中で必要以上に割れたりした場合は、元に戻せない。それだけに、石材を加工する場合は、素材の特徴をよく知ったうえで、技術を身につけ、加工に適した道具も準備しながら製作にあたったことが推測される。このような制限の中で石の造形は生まれている。

本展においては、石の造形は大きく「石器」と「石製品」「石製模造品」に分かれる。一見似たような名称だが、考古学では意味が大きく違う。出品番号1〜4の「石器」は、用途が衣食住に密着したものであり、実用の道具である。一方、出品番号6〜15の「石製品」は、本来は貝や金属など別素材で作られた製品の形態を、石製品の場合には主に碧玉・緑色凝灰岩など特定の石材で写し取り製作したものである。このことから、宝器・儀器としての性格が考えられている。また、これらは古墳時代の遺物であり、「石製品」の場合は、製作地の大半が緑色凝灰岩の有力産出地である北陸地方にある。当時の政治的背景のもとに、ある程度集約して生産されて、一定の意味を付与されて配布・流通したと考えられている。これらの遺物に対して、特に「石製品」と呼んでいる。

出品番号16～20の「石製模造品」は、石製品と同様に勾玉や農具などを蛇紋岩など加工しやすい石材で写し取り製作された祭器である。「石製品」「石製模造品」に共通するのは、当初は器物を比較的正確に写し取っていたが、程なく省略が始まることである。考古資料は、多くの場合、当初の形態から離れていく方向で造形が変化していく。研究の上では、この造形の変化を検討することで当時の社会を復元するための様々な情報を得ようとするのである。

なお、石器においても何を写し取ったのか不明なものが多い。そのひとつが出品番号5の御物石器である。他の石器は実用的な道具であり、機能が明確であることから、造形上も現代人である我々が見て容易に何であるかの判断がつくが、儀器・祭器と考えられるものは、往々にして写し取った対象が不明であることが多い。しかし、これもまた造形の妙味といえるのかもしれない。

石の造形で最後に触れておきたいのは玉である。玉と聞くと、多くの人は勾玉を思い浮かべるだろう。しかし、出品資料を見るとわかるように、多様な石材を用いて多様な造形をもつ玉が多いことにも気づかれることだろう。また、本展では、玉は便宜上「石の造形」で扱っているが、他の素材としてはガラス製のものもあれば、金製や銀製のものもある。玉それ自体は小さいが、各素材を横断する大きな広がりをもつ資料なのである。

土の造形 土の造形は、すなわち粘土の造形といえる。本展覧会においては、陵墓や古墳から出土した埴輪や須恵器を中心に展示している。

先ほど、石の造形はマイナス方向への加工であることを述べた。一方、土の造形は粘土の可塑性をもとに、様々な素材をつなぎ合わせてプラス方向への加工が行える点で、多様な造形を生めるように思える。ただし、プラス方向の造形とはいえ、気ままに製作できるわけではない。特に、土の造形の場合、単に粘土で整形しただけではなく、最終段階としての焼成作業がある。土の造形とは、焼き物なのである。特に、古墳時代には朝鮮半島から新たに窯で焼成する技術が伝わってくる。それらの導入も含めて、製作者が埴輪や須恵器を製作するにあたっては、素材の特性を知り、必要な技術を身に付ける必要がある点に変わりはないのである。

また、出品資料には含まれないが、縄文土器の自由闊達な形を見ると、土の造形の特徴が発揮されていると感じる。ひるがえって、埴輪や須恵器を見てみよう。出品番号36～43の人物・動物・家などを写し取った形象埴輪は、実物を彷彿とさせ、土の造形の真骨頂ともいえる。須恵器も、出品番号50の装

飾付須恵器などは、本体の器の上を小像が飾るなど、造形上の特色を示している。一方で、出品番号47の甕や49の提瓶のように、特徴的な形態のものが見られる以外は、比較的簡素な印象を受けるものが多い。裝飾付須恵器にしても、小像が飾らなければ、形態としては比較的単純なものである。

これには、須恵器の作り方が影響している。須恵器は、現在の陶磁器の作り方の出発点に位置している。ロクロの回転力を利用して整形していくため、必然的に上(下)から見た場合に円い形の器が作られていく。回転力を利用した製作技術は、土師器や埴輪にも応用されていくが、やはり須恵器に顕著である。その意味では、多くの須恵器に見られる、簡素ではあるが共通性の強い形態などは、ロクロの回転力を利用した須恵器独特の造形といえることができる。

なお、展示品には含まれないが、須恵器の中にも、家形や革袋形、皿などにロクロの回転力によらない独特な造形を示すものも存在するし、出品番号44の甕のような大型品は、ロクロの利用が困難であることから異なる技術も用いられた。器の種類によって、もともと多様な造形が求められなかったこともあるであろうし、須恵器ひとつをとってみても、その造形の背後には様々な理由が考えられる。

金属の造形 金属の造形は多彩である。本展では、特に、鉄・銅・金を用いた金属製品を展示している。鉄だけで仕上げられた造形としては、出品番号84・85の鉄製の衝角付冑がある。現在は錆により往時の状態がわかりにくい。黒漆を塗られた事例が知られている。銅製品も、銅鐸・鏡など弥生・古墳時代を代表する造形を展示している。それ以外にも出品番号70の馬形帯鉤など、ほとんど日本では出土していない貴重な資料も並んでいる。馬という比較的身近な動物をあしらった造形も、現代人である我々の目を引くところである。

また、銅は金銅製品として、銅板を用いた造形が見られるが、多くは铸造で製作されている。考古学の研究においても、铸造によってできた製品、造形が研究の主要な対象になる。しかし、この铸造を行うためには、鑄型が不可欠である。鑄型は壊れやすいために、出土資料としては少量であるが、これまでも研究は進められてきた。鑄造品の表面に文様がある場合は、それは鑄型に彫り込まれていたものである。鑄型は出来上がった製品にも劣らない立派な造形といえよう。そして、その鑄型の素材をみると、石であったり土(粘土)であったりするのである。例えば、銅鏡という金属の造形を生み出すために、石

の造形、土の造形が存在しているのである。

最後に金銅製品と金銅装の製品について見ておきたい。金銅製品(銅板に鍍金あるいは金箔押しをしたもの)としては、出品番号74の「金銅製四環壺」(図1)や75の「龍文透彫帯金具」(図2)がある。いずれも、彫金により細密な文様が描かれている。

図1 「金銅製四環壺」に見られる彫金

図2 「龍文透彫帯金具」に見られる彫金

「金銅製四環壺」の文様はそれが描かれた後に、文様どうしの隙間を魚子^{ななこ}が埋めている。現代の彫金においても、魚子は主文様を引き立たせるために、周囲を埋め尽くすように施されるようである。「金銅製四環壺」で見られる技法が、脈々と現代まで受け継がれてきたことを示すものであろう。

本展が初めての展示となる、出品番号86の「金銅装横板鍔留衝角付冑」も大いに注目すべき資料である。金銅装とは鉄地に鍍金などを施した薄い銅板を被せる技法である。造形上は、出品番号84・85の衝角付冑と変わらないが、金銅板を被せ、帯金具や四環壺と同様に彫金による細密な文様が描かれる

ことで特別な冑になっている(図3)。守り伝えられたもの 三の丸尚蔵

館には一組十段の重箱に納められた各種の考古品がある。各テーマに振り分けることはできるが、まとまって保存されてきたことにこそ意味があるため、ひとつのまとまりとして展示することにしたものである。ま



図3 「金銅装衝角付冑」に見られる彫金

とまりといっても、各資料は個別的であり、ひとつの遺跡からまとまって出土したというものではないが、かえって、収集した当時の古器物への興味のあり方などが反映されているようである。考古品を通して収集が行われた時代相を考察することができる、興味深い歴史資料といえることができる。

その他の造形

ところで、ひとつ忘れてはいけないことがある。現代の我々はもちろん古代の人々も、展示テーマに掲げた素材だけを利用して生活していた訳ではない。出品資料を見ると、出品番号28の玉には、石に混じってガラス製のものがあり、装身具としての玉に彩りを添えている。縄文時代の磨製石斧は刃先を磨いて切る・削る機能を向上させている。切ったり削ったりする対象は何かという点、それは木材であろう。石斧に見える造形の変化は、木材利用の規模の拡大や多様な木製品の製作などを反映している可能性があり、間接的にはあるが、異なる素材による造形が見えてくる一例ともいえよう。現在の我々の生活の中でも、木製品の占める割合は高い。それに反して、腐朽しやすいために発掘で検出される可能性の低い木製遺物は、考古資料の泣き所のひとつだった。近年、主に発掘技術の向上や湿地帯での発掘調査が進んだことで、良好な木製遺物の出土が増えて、多くのことがわかるようになってきたが、なお見えざる(見えにくい)造形であることに変わりはない。

本展では、代表的な素材として「石」「土」「金属」を掲げたが、これらを素材とした道具がさらに新たな造形を生んでいる。決して、これらの素材は単独で使われるのではなく、相互に密接に関係しながら様々な造形へとつながっている。

テーマとして、「ガラスの造形」や「木の造形」なども当然あり得るのである。観覧者の皆さんには、そのあたりも意識しながらご覧いただければ幸いである。(書陵部陵墓課・清喜裕二)

参考文献

- 大田区立郷土博物館編二〇〇一『ものづくりの考古学―原始・古代の人々の知恵と工夫―』東京美術
- 潮見 浩一九八八『図解 技術の考古学』有斐閣
- 村上 隆二〇〇七『金・銀・銅の日本史』岩波新書 新赤版 一〇八五 岩波書店

I 石の造形

石は、地球の生成とともに作り出されて、様々な条件により色々な種類の石が生まれました。人間は、早くから石を加工することで生活を支える道具として利用したほか、色味の美しい石などは装飾品や宝器の素材としても利用しました。また、古代の人々は、用途によって取捨選択しながら生活圏で取れる石を利用しつつ、産地が限られる貴重な石は交易によって入手していました。ここでは、石を通して、道具や装飾品の多様な造形を紹介します。

1 削器さつき

一点(書陵部)

北海道胆振国虻田郡狩太村字ニセコアン地区(現 虻田郡ニセコ町)

黒曜岩(石) 長一三・八

縄文・統縄文時代

本資料は、北海道の南西部、現在のニセコ町で出土したと記録が残る。明治四十三年(一九一〇)にニセコアンヌプリという山の南麓を開墾中に、偶然出土した打製石器である。左右対称の精美な形で、刃先をごく一部欠く以外は、本来の形を残していると考えられる。一見すると柄のついた短剣のようにもみえる。

黒曜岩(石)は、石器の主要な材料として旧石器時代から使われており、北海道は紋別郡白滝村白滝遺跡に代表されるように、主要な産地のひとつとして知られている。現在では装飾品の材料としても使われることがあるように、漆黒の色合いの中にガラス質特有の透明感がある。また、石器としては刃物としての高い機能が備わる。表面を細かく剥離させることで全体を整形しており、剥離面が貝殻状になる特徴がある。それが折り重なることで、造形上独特の質感・立体感を生み出している。

偶然の出土であるために、作られた時代を特定することは難しいが、周辺では縄文時代の遺跡が知られている。また、本資料と類似する石器として、統縄文時代前半期に北海道東部を中心に広く分布する「削器」と称されるものが知られている。食材等を切る、削るための道具と考えられており、類品である可能性から、その名称に従った。

なお、北海道は時代区分が本州地域とは異なっているところがあり、統縄文時代とは弥生時代から古墳時代におおむね対応する。本資料については、造形上の特徴や作られた時代の解明など、今後の研究に俟つところが多い。

表裏

2 石鏃

六点〔書陵部〕

出土地不明

チャート製ほか 最長三・一

縄文時代

石鏃は字の如く「石を素材とする鏃」である。比較的硬質の石材を用いて、先端が尖るように整形した打製石器である。矢柄への装着の仕方により、下方の突起がないもの（写真上段）とあるもの（同下段）などに分けられる。考古学の研究を行う上では、これらの形態の違いが、地域や年代の区別の指標となることがある。

〔官四〇〕

3 石槍

一点〔書陵部〕

出土地不明

頁岩製 長一〇・七

縄文時代

石槍も石鏃と同じく「石を素材とする槍」である。打製石器の名の如く、打ち欠くことで上下左右がほぼ対称の、細長い木の葉状の形態に整えている。後の時代に出てくる金属製の槍とは、柄との装着部分に違いがあるものの、基本的には同じ形態である。長い年月を経て時代が変わっても、「突く」「刺す」といった機能が変わらなければ、形の変化は少ないことがわかる。〔官三八〕

4 磨製石斧

二六点〔書陵部〕

能登 穴水、佐渡 鹿伏以外は出土地不明

蛇紋岩製ほか 最長一八・五

縄文時代

磨製石器は、縄文時代に入ってから打製石器よりも遅れて出現してゆく。本資料はすべてについて全体が磨かれているが、ほかの出土品の中には、刃部の箇所だけを磨いたものも存在する。また、大きさも大小の違いが目立ち、形も刃の幅が広いものや狭いものなど多様な形態がみられる。

また、刃部を磨くということは、刃をより鋭利に整えるということであり、刃物としての機能の向上につながるものである。機能の向上を目指して、磨く作業を加えたことで、打製石器と比較して、造形上の違いが明確に現れた。一方で、磨くことに適した石材が選ばれる傾向にあり、多くの場合、打製石器に比べてやや軟らかめの石材を使用していることが知られている。

つまり、磨くことと大きさや形が多様になるということは、当時の人々が使い方（作ろうとするもの）に合わせて道具を選択・準備したと考えられ、人間の生活の中でも生産に関わる面で、その発展段階を示しているのではないかと考えられている。

なお、これらの出品資料の出土地は「能登 穴水」や「佐渡 鹿伏」の貼り紙が残るものが一点ずつある以外は不明である。複数の出土地の資料から構成されている可能性がある。〔官七〕

5 御物石器ぎよぶつせっき

二点(書陵部)

石川県能登郡穴水町比良法栄寺境内
ホルンフェルス製 長三六・〇(上)
縄文時代

まず、縄文時代の石器に「御物」という呼称がつくことの意外さが、この石器の特徴のひとつといえる(名称の由来については、21頁を参照)。文様を施した棒状の磨製石器であり、二点は相似た造形を示している。文様の細部と右側端部の把頭状の装飾部の形態に違いがみられる。縄文時代の終わり頃に製作されたものと考えられているが、このような造形が何を写し取ったものか、用途はいかなるものであったのかなど、まだ明らかになっていないことも多い。

石鏃、石槍や石斧(出品番号2〜4)は、石器の中でも、狩猟や伐採など衣食住に密着した道具であり、日本中で出土するものである。一方で、限られた地域でのみ出土するものもあり、「御物石器」は岐阜県飛騨地方から北陸地方を中心にみられるのである。衣食住に直結するものではないと考えられることから、何らかの儀礼や祭祀の際に使用されたと推定される。用途は明らかではないものの、少なくともこれらが出土する地域では密接な交流が行われて、同じ道具を用いた祭祀などを行っていたと考えられる。

このような特徴的な資料は、考古学において、当時の地域社会の広がりや交流の様子を知るための貴重な資料となっている。

〔官二〕

表

6 鍬形石^{くわがたいし}

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 伝 栗山古墳
酸性凝灰岩製 長二一・〇
古墳時代

出品番号6、8は、鍬形石と呼ばれている腕輪形石製品の一つである。上部に台形を呈する傘のようなものが削り出され、中央に卵形をした孔が開いている。その孔の右側、あるいは左側には四角形をした出っ張りがあり、下には長方形の板状のものが取り付いている。横から見ると、板状の部分には反りが認められる。

この名称は江戸時代の本草学者で弄石家^{ろうせきか}として有名な木内石亭が、この奇妙な形をした石を鍬形石と呼んだことが由来となっている。彼が兜^{かぶと}の正面に取り付けられた鍬形をイメージしたのか、あるいは農具の鍬^{くわ}からとった名称なのかについてはよくわからない。

裏

現在、この鍬形石の原形は、ゴホウラという沖縄周辺の南海で捕れる大形巻き貝を縦に輪切りにして製作された腕輪の形であると考えられている。弥生時代において、この貝製腕輪は、男性の腕を飾る装身具として使用されてきた。そしてそのような風習は北部九州を中心とした地域で、一つの社会規範となっていた。この弥生時代北部九州の規範が、古墳時代へどのように引き継がれたのか、あるいは貝から石への材質転換はどのようにしてなされたのかについては、まだ十分な回答は得られていない。古墳時代においては、実際に腕に装着する装身具ではなく、持っていることが価値のあること、すなわち宝器のように取り扱われていたと考えられている。

(6・陵一五三、7・官八八、8・官八七)

7

鍬形石

奈良県北葛城郡広陵町 伝 大塚陵墓参考地(新山古墳)
酸性凝灰岩製 長一八・〇
古墳時代

一点(書陵部)

表

裏

8

鍬形石

奈良県北葛城郡広陵町 伝 栗山古墳
酸性凝灰岩製 長二〇・三
古墳時代

一点(書陵部)

表

裏

9 車輪石^{しやりんせき}

一点(書陵部)

新潟県鹿伏山

酸性凝灰岩製 長二二・二

古墳時代

出品番号9、11の三点は、車輪石と呼ばれている腕輪形石製品の種類である。9の外形は楕円形を呈し、その中央に丸い孔が開けられている。その他にも楕円形の外形に楕円形の孔が開けられたもの、円形の外形に円形の孔が開けられた形状の車輪石が存在する。

この車輪石の名付け親も、木内石亭である。文字通り大八車などの車輪からの発想であろう。しかしながら、鍬形石と同様に、この形の原形も南海で捕れる貝製の腕輪である。その貝はオオツタノハと呼ばれ、その頂部中央に穴を開けて腕飾りとしたものである。その根拠として中央から放射状に刻まれた文様が、貝本来の表面に認められる肋条^{ろくじょう}に表現が酷似していることによる。9の場合、この文様の断面形は匙面取りと呼ばれ、スプーンですくい取ったような形状をしている。その他にももう少し角張った折面帯^{せつめんだい}と呼ばれている屈曲を施文し、その頂部と谷部に細い沈線を加えた文様も多く認められる。この車輪石も鍬形石と同様、本来の腕輪としての機能は失われており、持つことに意義のある宝器として、古墳時代の副葬品としての意義を有していたものと考えられる。

(9…官一七、10…陵一三六二二、11…官一五)

10

車輪石

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 伝 栗山古墳
酸性凝灰岩製 長一・二・八
古墳時代

表

裏

11

車輪石

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)
酸性凝灰岩製 径一〇・五
古墳時代

表

斜

出品番号12・13は、石釧と呼ばれている腕輪形石製品の一つである。石釧の命名は木内石亭ではなく、江戸時代には單純に石環と呼ばれていた。石釧の名称は、この石製品が、釧すなわち腕飾りであるとの用途が想定された大正年間の命名である。今日、石釧が実際に腕に着装する機能が失われていると考えられることから、「釧」という腕飾りを意味する漢字を使用した際には矛盾があることは確かである。しかしながら石釧という名称が学術用語として定着しているため、あえて他の名称を用いることも混乱を招きかねないことから、本展においても使用している。

形状は円形の外形を呈し、中央部に孔が開けられている。形のバリエーションは鍬形石や車輪石に比べ少ない。円形を呈する車輪石との区別は、車輪石を輪切りにしたときの断面が、高さに対して幅が広く、一方、石釧は幅よりも高さが凌ぐ点によって見極めることが出来る。この違いは、そもそも原形となった貝の腕飾りの違いに起因する。すなわち車輪石は、オオツタノハ製の貝製腕飾りを原形として製作されていると考えられるのに対し、石釧の原形はイモガイという巻き貝を、横に輪切りにした貝製腕飾りと考えられている。

文様については形状とは異なり非常に多くのパターンをもつ。最もシンプルなものは斜面、側面とも匙面取りだけを施しただけの石釧が存在し、原形の貝製腕飾りに最も近いという点で、最古型式の石釧とされる。石釧特有の文様としては斜面、側面に細刻線を施文するものである。その他には車輪石に見られるような折面帯を斜面に施すもの、細刻線と折面帯を組み合わせたものを施すなど様々である。側面についても、匙面取りを二条、三条施すもの、沈線を施すものなどが知られている。

14 剣形石製品

一点〔書陵部〕

新潟県鹿伏山
珪化木製 長一三・二
古墳時代か

15 剣形石製品

一点〔書陵部〕

三重県伊賀市 石山古墳
緑泥片岩製 長一五・七
古墳時代

16 石製模造品(刀子形・鎌形)

一〇点〔書陵部〕

群馬県高崎市 高崎市第一号墳
緑泥片岩紋岩製ほか
長八・三(鎌形)
古墳時代

出品番号14・16は「石製模造品」と呼ばれている遺物である。すなわち「石でできた実用に供することができないもの」である。もう少し説明すると「石剣」といえば、縄文時代に実際に武器として使用された遺物の名称である。一方、「剣形石製品」とは、古墳時代にあって剣としての実用品ではないということ、その名称をもつて示している。

それでは実用でないとすれば、何に使ったのであろうか。これを正確に指摘することは難しいのであるが、「祭祀用」としておくしかないのが現状である。出土状況から考えて何らかの祭祀であることは確かであるが、その祭祀の内容を復元することはできない。このような「模造品」は石製に限らず、金属製、あるいは土製でも存在している。

さらにこの石製模造品でも、実用品に近い形状から、本来の形とはかけ離れた形状となっている模造品までが存在する。例えば出品番号15に示した剣形石製品は、柄の部分がきちんと形作られており、またわずかではあるが剣身にはその中央に鑄を認めることができる。しかしながら出品番号19に示した剣形石製品は、実用の剣からは大きく異なった形になっている。このように比較的実用の利器（りき）に近い形で模造されているものが古く、時代が下るにつれて本来の形が失われ形式化していくものと考えられている。

〔14：官八、15：官四八、16：陵三二・三三〕

左端が斧形、他はすべて鎌形

17 石製模造品(斧形・鎌形)

七点(書陵部)

奈良県奈良市 宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号(大和六号墳)
緑泥片岩製 長八・五(斧形)
古墳時代

出品番号17、19もすべて「石製模造品」と呼ばれている遺物である。そのうち出品番号17の宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号から出土したこれらの斧形、鎌形は実物に忠実に造られている。特に斧形における柄を差し込むところは刳り抜いてあり、まさに実物の鉄製斧と同様の作りとなっている。同じく鎌形についても、柄を取り付ける部分に少し厚みを持たせて削り出しており、実物に備わっていたであろう柄を取り付けられるような工夫をそのまま模造している。

その一方、出品番号18の大和四号墳から出土した模造品は、写実性を失った模造品である。特に、有孔円板と呼んでいる模造品は、まさに見たままを名称とするものであって、どんな実用品を模造品としたかについては諸説がある。そのうち一番可能性が高いとされるものは、銅鏡と考えられている。日本の古墳から出土する鏡は、化粧道具としての機能ではなく、呪術性の高いものと考えられており、有孔円板が鏡を模造したものと考える根拠となっている。同様に、勾玉形も、装身具を構成する玉としての勾玉の用途ではなく、呪術性のある勾玉を、模造品としたと考えられる。そのため玉のような厚みはなく、他の模造品と同様偏平な断面形状を呈している。

出品番号19の石製模造品は、茨城県の八重^{やえ}から出土している。出土した古墳は特定できていないが、大和四号墳から出土したものとよく似ている。すなわち、遠く離れた地でも、同様の祭祀がなされていたことを示している。しかも石材は在地のものを使用しており、現地で製作されていることがわかる。

[17:昭一〇ウワナろ、18:昭一六ヤマト四、19:陵一八・二九]

18

石製模造品(劍形・有孔凹板・勾玉形)

一三點(書陵部)

奈良県奈良市 大和四号墳
緑泥片岩製 長四・三(劍形)
古墳時代

19

石製模造品(劍形・有孔凹板)

一一點(書陵部)

茨城県八重
緑泥片岩製 長二・五(下段左端)
古墳時代

20 子持勾玉こもちまがたま

一点(書陵部)

出土地不明
 滑石製 現存長八・六二
 古墳時代

本資料は、頭部を失っているが子持勾玉と呼んでいる遺物である。古墳時代に製作されたものであることは間違いないが、出土地については不明である。現在失われている頭部には、一つの孔が貫通していたはずである。

さて、この子持勾玉が何に使われていたかとなると、これも正確にはわからない。しかしながらこの遺物は、古墳の副葬品として出土するものよりも、いわゆる祭祀遺跡から出土することが多い。例えば、奈良県の大神神社おほみわじんじやは日本最古の神社とも言われているが、この境内からはいくつもの子持勾玉が見つかっている。三輪山をご神体とするこの神社は、おそらくその起源は古墳時代まで遡ることができるものであり、このような場所から出土するところが子持勾玉の性格を呪術的な祭祀に使用されたものと考ええる根拠である。

このことは「玉」たまが単に装身具を構成する部材ではなく、勾玉単独で呪術的な性格を帯びていたことを示す。その一つ例としては、三種の神器の一つである「八尺瓊勾玉」やさかたにのまがたまを示せば事足りる。もちろん「八尺瓊勾玉」がどのような形状であるかは不明であるが、名前が示すとおり勾玉であることは間違いないだろう。

このように勾玉がなぜ呪術性があるのか、さらには子持勾玉が祭祀遺跡から見つかる理由は、古墳時代人の精神性を考える上で興味深い。子持勾玉の場合は、親玉である勾玉の背中、腹、そして側面にも小さな勾玉が取り付けられている。このことは、玉が玉を産むこと、すなわち玉が魂に通じ、さらには魂の再生産であるとも考えられる。子持勾玉は古墳時代人の心の中を垣間見ることができるよう資料である。

〔官九〕

表裏

石器・石製品の名称について

石器を展示するときには、おそらく日本全国の学芸員が苦勞している。なぜならその展示している石器の用途が、題簽だいせんに書いてある名称から直ちに理解できない、あるいは誤解してしまうことが多々あるからである。例えば、次の文章は正しいであろうか。

「昨日、村の男衆が総出でイノシシを仕留めてきたんだ。だから女衆も皆で、石包丁で細かく肉を刻み、石皿に盛り付けてくれた。ぼくは、たくさんの肉を、石匙を上手に使用して食べたんだ。」

この文章を読む限り、縄文時代のある幸せな一日を思い浮かべるかもしれないが、内容にはいくつものまちがいがある。その一つ。「石包丁」は、肉を切る道具ではなく、弥生時代における稲の穂を摘むときに使用する道具である。二つ目のまちがい。「石皿」は料理を載せるお皿ではなく、堅果類等を磨り潰すときに使用した台石である。三つ目。「石匙」はいわゆるスプーンではなく、縄文時代人が使用した小刀のような道具である。よって、石匙で食事を口に運ぶと、おいしく食べられるどころか、口中血だらけになるに違いない。この文章は極端な例かもしれないが、観覧者に誤った情報を提供しないようにするにはどうしたらいいのであろうか。たとえば先の「石包丁」ではなく、近年の教科書では「穂摘具ほつみぐ」というような名称を使用している例もある。しかしながら、すべての石器でこの方法が有効でもあるまい。「石匙」を「石製打製多用途ナイフ」というような名称に言い換えてみたところで、なかなか一般に普及する名称とも思えない。

改めて石器の命名方法を考えてみると、いくつかのパターンが指摘できる。その一つ目。今でもその形を見ることからある程度用途を正確に類推できるもの。たとえば、石鏃せきさくがあげられる。「鏃」という漢字の意味が理解できれば、この石器は弓矢の先端に取り付ける矢じりであることを理解することはそう難しくなからう。

二つ目の命名方法。これは用途と全く関係なく、その遺物のエピソードから命名されたもの。その代表例が「御物石器」(出品番号5)である。これは、明治天皇に献上され、御物となったというその逸話から類似した石器の名称にもこの名前が用いられ、いつしか学術名称として定着したものである。しかしこの名称も、明治天皇に献上されてすぐに定着したものではない。明治十七年(一八八四)に『Notes on

Ancient Stone Implements of Japan』(日本書名『日本大古石器考』)を著わした神田孝平は、御物石器について英語名「Sekisui」あるいは「Stone-rod」という名称を与え、漢字では「石椎」として記述している。すなわち、「石でできた何かを叩く道具」と考えたようである。すなわち献上されてからすぐには、「御物石器」という名称は定着していないことがわかる。

三つ目の命名方法。これは、命名した時代において使用しているものの形に似ていることから、石器や石製品の名称としたものである。たとえば、出品番号9に示したような「車輪石」が該当する。しかしながら、この名称が記された題簽を読んだ観覧者は、古墳時代に車が使われていたと誤解しないであろうか。むしろ素直に読めば、古墳時代の石でできた車輪としか理解できないであろう。このような誤解をどう防ぐか、それは、解説文にも述べたように「祖形は貝でできた腕輪であるが、古墳時代では石に材質を換え、着装することはなくなった腕輪の形をした石の宝器」と書くのであろうか。これでは名称にならないということであれば「腕輪形石製宝器」とするのが妥当であろうか。

もう一つ、四つ目の命名方法。これは、その遺物の形そのままを名称とするものである。例えば出品番号18に示したような「有孔円板」とは、文字通り小孔が穿たれた丸い板状の石製品である。すなわち名称がその遺物の形を示していることはわかるが、名称だけではその用途を理解することは難しくなからう。

なぜこのようにややこしい命名方法になったのであろうか。これは考古学という学問の宿命だが、文字資料がない時代において、遺物の名前はそもそもわからないうと聞き直ってしまうしか仕方がない。縄文時代の石器を縄文人がなんと呼んでいたのかについては、永久にわからないと断言しておこう。

石器の名称をこうすればよいという成案は持ち合わせていない。これらの名称は、石器が人間の手によるものという認識が芽生えた江戸時代から徐々に名付けられてきた。よって今日では、その名称がふさわしくないものも多い。しかし一方では、学術名称として市民権を得ているものもまた多いのが現実である。

石器を展示する学芸員が、今日もどこかで頭を抱えている。どうやって観覧者に、誤解なく石器の用途を理解してもらえらるのだろうか。(書陵部陵墓課 徳田誠志)

21 勾玉・管玉

三点(書陵部)

長門国厚狭郡厚西村大字厚狭小字前田

(現 山口県山陽小野田市厚狭)

硬玉製ほか

弥生時代か

硬玉とは、翡翠のことである。「玉」といえば「翡翠の勾玉」がすぐに連想されるように、我が国古代の「玉」においては、硬玉をはじめとする緑色の石材が主流であり続けた。

本例は、極めて小さく、さらに、勾玉は、穿孔のある頭部の方が尾部よりも小さいという歪な形状をしている。これは、勾玉が定形化する以前の様相を示しているものと思われる。

〔勾玉・陵三六、管玉・陵三七〕

21-1 管玉(碧玉)

21-2 勾玉(硬玉)

22-1 勾玉(硬玉)

22-2 丸玉(ガラス)

22-3 管玉(碧玉)

22 勾玉・管玉ほか玉類(丸玉)

一〇一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 黒石山古墳(黒石5号墳か)

硬玉製ほか

古墳時代

一般に勾玉は、巴文のように、丸い頭部から急にすぼまる尾部がつくものと思われがちだが、実際には、本例のように、頭部から尾部までほぼ同じ太さか、ややすぼまる程度のものが通例である。左の勾玉の頭部には、孔から放射状に伸びる刻線が認められる。このように、頭部に放射状の線刻を持つ勾玉は、香辛料の丁字(クローブ)を連想させることから、「丁字頭」と呼ばれる。

ガラスは、弥生時代に伝来し、以降、輸入品や国内での再加工品がアクセサリーに用いられた。当初は、本例のように、青く紺系統のもののみであった。

〔勾玉・陵二三〇、丸玉・陵一一九、管玉・官七七〕

各法量

21-1 長〇・七(左)

21-2 長〇・七六

22-1 長三・三(左)

22-2 径〇・四〇・四五

22-3 長〇・七〇・四五

23-2 管玉(碧玉)

23-3 管玉(碧玉・砂岩 右から2点)

23-1 大管玉(緑色片岩)

23 大管玉・管玉 二〇点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)

碧玉製ほか
古墳時代

本資料は多数の銅鏡(出品番号59・62・65・66)や帯金具(同75)、石釧(同12)などとともに出土したものである。

大管玉は、古墳時代の管玉状の石製品としては最大級のものである。その大きさを、アクセサリーとして身につけていたものではなく、石で作られた杖である「玉杖」の柄を構成する部材であった可能性がある。

〔大管玉・陵一五五、管玉・陵一二三ほか〕

各法量

23-1 長一〇・二

23-2 最長三・二五

23-3 最長五・六

24 勾玉・管玉ほか玉類(棗玉)

七点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 三吉陵墓参考地(新山古墳)

硬玉製ほか 最長二・九五(管玉)
古墳時代

「玉」のうち、樽のように筒部の中程が膨らんだ形のものを、ナツメの果実の形に似ていることから、「棗玉」と呼んでいる。本例には認められないが、棗玉には、羽状文(羽状文とは、《のよう》に「く」字状の模様を、方向をそろえて連続させたもの。「綾杉文」とも呼ぶ)を刻むことが通例であったようである。

〔勾玉・陵一四三、棗玉・陵一四四、管玉・官七九〕

左から勾玉、棗玉、以下右へ5点が管玉

(碧玉)

大勾玉

25-1 大勾玉(滑石)・勾玉(碧玉1点、他はすべて滑石)

25-2 棗玉(緑色片岩)

25-4 管玉(滑石)

25-3 管玉(碧玉)

25 大勾玉・管玉ほか玉類(勾玉・棗玉)

九八点(書陵部)

奈良県広北葛城郡広陵町 栗山古墳

碧玉製ほか

古墳時代

古墳時代前期の中頃になると、滑石製の模造品が現れ(出品番号14、20)、前期の終わり頃になると、滑石で作られた勾玉や管玉などが見られるようになる。滑石製の玉は、輝きのない色調や大きさ、一箇所から大量出土するという状況などから、アクセサリーではなく、祭祀における大量消費を前提とした代用品であるとされる。

古墳時代の勾玉としては最大級のものである大勾玉は、石質では滑石に分類されるものの、緑色の石材を選んでいる点や、丁寧に作っている点などから、他の滑石製玉類とは同列には扱えないものである。頭部の線刻は、勾玉の頭部に布などを被せることがあったことを示唆している。

〔大勾玉：陵一五四、勾玉：官八五ほか
棗玉：官一一、管玉：官一〇三ほか〕

各法量

25-1 最長九・七

25-2 最長一・五

25-3 長一・五五、四・三

25-4 長一・五、二・五五

(滑石)

(碧玉)

(ガラス)

(碧玉)

(硬玉)

26-1 勾玉 (硬玉・ガラス・碧玉・滑石)

26-5 ^{うす}白玉 (滑石)

26-6 小玉 (ガラス)

26-2 棗玉 (緑色片岩)

26-3 管玉 (碧玉)

26-4 丸玉 (ガラス)

26

勾玉・管玉ほか玉類 (棗玉・丸玉・白玉・小玉)

一六四七点(書陵部)

大阪府堺市 塚廻古墳 硬玉製ほか 古墳時代

本例の勾玉の中でひとときわ目を引く大きなものは、硬玉製である。古墳時代における硬玉製の勾玉としては、かなり大きな部類のものになる。

ガラス製の丸い玉については、およそ〇・五センチ前後を境として、それより大きなものを「丸玉」、小さいものを「小玉」と呼びならわしている。

滑石製の小さい玉については、その形状から、「白玉」と呼んでいる。本例の白玉には端面が段違いになっているものがあり、管玉として作ったあとに切れ目を入れて切斷するという、白玉の製作方法の一端を知ることができる。

〔勾玉：陵九一、棗玉：陵九二、管玉：陵七九、丸玉・小玉・白玉：陵八〇〕

各分量

26-1 最長六・一七

26-2 最長一・〇六

26-3 長一・八五〜三・一

26-4 径〇・六〜〇・八

26-5 径〇・三五〜〇・五五

26-6 径〇・二〜〇・三

27-1 勾玉(硬玉)

27-3 丸玉(ガラス)

27-2 棗玉(硬玉)

27-4 管玉(碧玉)

27 勾玉・管玉ほか玉類(棗玉・丸玉) 九五点(書陵部)

福岡県京都郡菟田町 御所山古墳
硬玉製ほか
古墳時代

本例の出土地は、これまで見てきた出品番号22～26とはうってかわって、近畿地方から遠く離れた九州地方である。遠く離れていても、アクセサリーとしての玉の種類や素材などに違いは見られない。こうした点からも、古墳時代の文化が、列島の広い範囲で共通していたことを知ることができる。

なお、本例の勾玉の形状は、古い特徴を持っているように見える。

〔勾玉・陵四二、棗玉・陵四一、管玉・陵四三ほか、丸玉・陵四〇〕

各法量

- 27-1 最長二・二
- 27-2 最長〇・九(左端)
- 27-3 径〇・七六〇・九
- 27-4 長〇・六五〇・三・四

28-1 垂玉(水晶)

28-2 勾玉(瑪瑙)

28-3 管玉(ガラス)

28-5 棗玉(瀝青)

28-6 丸玉(ガラス)

28-7 算盤玉(水晶)

28-4 管玉(碧玉)

28

勾玉・管玉ほか玉類

(垂玉・丸玉・棗玉・算盤玉)

五〇点(書陵部)

奈良県葛城市 小山古墳(小山1号墳)
碧玉製ほか
古墳時代

水晶は、弥生時代の後期から玉の素材に加わる。本例で「垂玉」と呼んでいるものは、水晶の結晶をそのまま利用しており、アクセサリーの垂飾に使われたものである。「算盤玉」は、文字通り、算盤の珠のような形状のものをそう呼んでいる。赤い瑪瑙は、古墳時代前期の中頃から玉の素材に加わる。瀝青は、天然のアスファルトである。

赤系統の玉は、弥生時代中頃に現れるものの、古墳時代に入ると一度姿を消し、瑪瑙が玉に加わる古墳時代前期中頃に復活する。

(垂玉・陵一三二、勾玉・陵一三二九、管玉・陵一三四ほか
丸玉・官一〇九、棗玉・陵一三三三、算盤玉・陵一三三三)

各法量

- 28-1 長二・九
- 28-2 最長三・〇五(左上端)
- 28-3 長二・三
- 28-4 長一・二〇一・七五
- 28-5 最長一・六
- 28-6 径〇・七二〇・九二二
- 28-7 径一・二(右端)

(硬玉)

(滑石)

(硬玉)

29-1 勾玉(瑪瑙・硬玉・滑石)

29-6 丸玉(瑪瑙)

29-5 平玉(碧玉)

29-4 管玉(碧玉)

29-3 棗玉(ガラス)

29-2 丸玉(ガラス)

〈連珠〉

29

勾玉・管玉ほか玉類

(丸玉・棗玉・平玉)

二四点(書陵部)

熊本県熊本市宮穴横穴墓群(加茂横穴墓群)

硬玉製ほか
古墳時代

ガラス製の丸玉のうち、二つがくついたりしたようなものは、「連珠」と呼んでおり、珍しいものである。

「平玉」と呼んでいるものは、扁平な形状のものである。

古墳時代の後期になると、平玉などが加わり、玉の形状も多様になってくる。

(勾玉・陵五一、丸玉・陵五三ほか、棗玉・陵五四、管玉・陵五一、平玉・陵五六)

各法量

29-1 長四・五(左上端)

29-2 径一・一(左上端)

29-3 長二・七

29-4 長一・七五

29-5 最大径一・七

29-6 径一・五

II 土の造形

土は「粘土」と言い換えることができます。可塑性に富んだ素材であることから、縄文土器や埴輪に代表されるように、多様な造形が生み出されました。宮内庁の所蔵品は、陵墓から出土した器物・動物等の埴輪や須恵器が中心となります。ここでは、実物を見事に写し取った埴輪や、新たに日本に伝わった技術である窯で焼かれた須恵器などを通して、土の造形を紹介します。

30・31 壺形埴輪

二点〔書陵部〕

奈良県桜井市 倭迹迹日百襲姫命大市墓（著墓古墳）
土製 30・高四五 31・高四二・四
古墳時代

口が二度開く形状の壺を「二重口縁壺」と呼び習わしており、本例は、その二重口縁壺を模した埴輪である。本例の形状は二重口縁壺そのものであり、一見しただけでは実用品の壺と区別がつかないが、実は焼き上げる前に底に穴が開けられている。貯める器としての壺の機能が否定されていることで、埴輪として作られていることが分かる。

埴輪が、墳墓へのお供え物を容れる器と、それを置くための台を模した物を起源として生まれたという事実をよく示す遺物である。

〔30・昭四三二天市〇四〇六一ほか、
31・平一〇オオイチ〇六〇四一・二〇ほか〕

33 円筒埴輪

一点(書陵部)

宮崎県西都市 男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地

女狭穂塚(女狭穂塚古墳)

土製 高六二・八

古墳時代

埴輪や土器の表面に見られる、刷毛で引いたような、平行するたくさん細かい線のことを、「ハケメ」と呼び習わしている。ハケメは、実際には刷毛によって引かれた線ではなく、板の端で埴輪の表面をなでることにより、年輪の凹凸で付く痕跡であることが明らかとなっている。円筒埴輪に施されるハケメの方向は、作られる時代によって変化することも明らかとなっている。

本例の出土地は南九州であるが、埴輪の形状や、ハケメの方向などの作り方の痕跡は、奈良県や大阪府から出土したものと変わりなく、遠く離れた場所であっても、埴輪作りに携わる人々に密接な交流があったことを窺わせる。

本例の口縁部には、「↑」のような絵とも記号ともつかない模様(ヘラで刻んだ記号という意味で「ヘラ記号」と呼ぶ。)が付けられているが、その意味するところは不明である。

〔昭五〇メサホ〇一〇一三ほか〕

32 鱧付円筒埴輪

一点(書陵部)

奈良県大和高田市 磐園陵墓参考地(築山古墳)

土製 高一一〇

古墳時代

土管のような筒状の埴輪を「円筒埴輪」あるいは「普通円筒埴輪」と呼び、本例のように、その両側に板状の部材を貼り付けたものを「鱧付円筒埴輪」と呼んでいる。

円筒埴輪は、墳墓へのお供え物を容れる器を置くための白、「器台」を模した物であったが、すぐに、墳丘を取り巻くようにたくさん並べることで古墳の内部と外界を遮断するもの、という意味を持つようになったようである。鱧は、並べる際に埴輪同士の隙間を塞ぐことになるため、遮断するという効果をさらに高めるためのものと考えられている。

表面に黒ずんだ部分があるが、これを「黒斑」と呼んでいる。窯などの大がかりな施設を使わず、いわゆる「野焼き」にて焼き上げると、表面にススが吸着して生じるものである。

〔平二二イワソ〇六一一九ほか〕

34 朝顔形埴輪あしがおがた

一点(書陵部)

大阪府羽曳野市 応神天皇惠我藻伏岡陵
土製 高一〇五
古墳時代

本例では上部が失われているが、筒状の胴体から頸のよ
うに一度すぼまったのち、口がラッパ状に開く形状のものを
「朝顔形埴輪」と呼び習わしている。「朝顔形」といっても植
物のアサガオを模した物ではなく、筒状の台の上に二重口縁
壺(出品番号31・32参照)を載せた状態を模したものである。

朝顔形埴輪は、墳丘を取り巻くように並べられる円筒埴輪
の列の中に数本おきに置かれるのが常であり、広義の円筒埴
輪に含まれる。

本例は、破片をつなぎ合わせて修復したものではなく、明
治二十年代に周濠の浚渫工事をおこなった際に、現状の姿の
まま出土したものである。一方に向けてやや細くなる筒状
で、細い側の口が開き、太い側が球状にすぼまるという形状
から、発見した当時の人々は大砲を連想したという。頸から
上の部分が欠けているとはいえ、焼き物である埴輪が、割れ
てバラバラにならず、これほど大きな形を保ったままで出土
するのは、かなりのレアケースである。

本例の上半部には赤い色の顔料が塗布されている。塗布
の際の刷毛の痕(文字どおりの刷毛目)やしぶきの飛んだ痕、
しずくのしたたり落ちた痕などが観察できる。〔官一四五〕

35 円筒埴輪

一点(書陵部)

大阪府茨木市 継体天皇三嶋藍野陵
土製 高六四・四
古墳時代

上から三分の二ほどの範囲にかけて黒い顔料が塗られている。この埴輪を作った人は、赤くするつもりで顔料を塗ったのであろうが、登り窯の中で高温・酸欠状態にさらされたため、黒ずんだ発色となつてしまつたようだ。

口縁部には、向かつて右を向く四本足の動物の形をしたへ

ラ記号が刻まれている。シカ説とウマ説があり、今も意見の一致を見ていない。本個体は、南北方向を主軸とする前方後円墳の、西側の造出し(つくりだ)(墳丘本体から飛び出した方形の小墳丘のこと。前方後円墳では、くびれ部に付くことが多い)と後円部との間に形成された谷部から出土したものである。四つ足動物のへラ記号を持つ円筒埴輪はもうひとつ出土しているが(写真下段、それが、墳丘の反対側となる、東側の造出しと後円部との間に形成された谷部から出土していることは興味深い。
〔平一四ケイタ二一四六一三ほか〕

36 鞞形埴輪ゆきがた

一点〔書陵部〕

大阪府羽曳野市

応神天皇惠我藻伏岡陵飛地ほ号(墓山古墳)

土製 高五九・一

古墳時代

「鞞」の形を模した埴輪である。「鞞」とは、矢を持ち運ぶための道具(これを「盛矢具」という)のうち、矢の先を上に向け、背中に背負う種類のもを指す。ちなみに、盛矢具には、矢の先を下に向け、腰に下げる種類のものもあり、それは「胡

籙ろう」という。鞞は、伝統的な歩兵用の装備、胡籙は、大陸から伝来した騎兵用の装備である。

箱状に作られている部分が矢を容れる筒を表現しているところで、本来は、その両側と上側に、背負い用のベルトや装飾のための板を表現した部分が作られていたが、向かって左側の一部以外は失われている。また、矢筒の後ろ側にあたる部分も、全くといっていいほど残っていない。

矢筒部分の上端部には、鏃やじりが、一部を浮き彫り

することで写實的に表現されている。また、矢筒部分に施されている、直線と円弧を組み合わせた文様は「直弧文」と呼ばれておりるもので、古墳時代に、対象を問わず広く用いられているものである(出品番号66参照)。

鞞や盾などの武器や武具が埴輪として作られ、埴丘の上に置かれているのは、その場の神聖さを表示しているとも、内部に侵入しようとするものを威圧するためともいわれている。

〔仮昭オウジほ〇一〇二一―ほか〕

37 人物形埴輪 女子頭部

一点(書陵部)

大阪府堺市 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵

土製 高一九・四

古墳時代

仁徳天皇陵で明治二十年代から三十年代にかけて行われた、最も外側の濠(第三濠)の掘削工事の際に、同陵の北西のあたりから出土したと伝わる。その位置から、同陵本体ではなく、城内に所在する大安寺山、あるいは飛地ち号(源右衛門山)に伴うものである可能性も指摘されている。

残念ながら頭部しか見つかっていないが、長く伸ばした髪を後ろでひとつに束ね、それを折り返して頭上に載せるという、島田髷に似た髪型が表現されていることから、女性の埴輪であることを知ることができている。ちなみに、男性は、長く伸ばした髪を左右に分け、それを折り返してまとめたものを耳の前に垂らす、「美豆良」という髪型をしていることが多い。

ほかの出土例を参考にすると、本例は、巫女を表した埴輪であったものと思われる。付近に、巫女が参加するような、何らかの儀式の様子を表現した埴輪群が存在していたものと推定される。

埴輪というと、本例のような人物形埴輪や馬形埴輪(出品番号40〜42)を連想される方も多いだろうが、それらは、埴輪としては古墳時代の中頃に現れる後発組である。本例は、そうした人物形埴輪の中でも、かなり早い段階に位置づけられるものである。

本例の、埴輪特有の素朴な作りから醸し出される表情は、見る角度によって微妙に変化するともいわれ、これまでに多くの人を魅了してきた。

〔特二〕

38・39 かこいがた 冨形埴輪・家形埴輪

二点(書陵部)

大阪府堺市 百舌鳥陵墓参考地(百舌鳥御廟山古墳)
土製 高四四・八(家形埴輪)

古墳時代

両者は、東西南方向を主軸とする前方後円墳の、南側造出しと前方部との間に形成された谷部にセットで置かれていた。

冨形埴輪(出品番号38)は、円柱とその間を板で塞いだ塀を表しているものと思われる。クランク状になっている部分には出入り口が表現されており、可動式の扉が付いていた。

家形埴輪(出品番号39)には、千木(屋根の両端で、高く突き出て交差している部分のこと)と堅魚木(棟の上で、棟と直交する向きで並べられた丸太状のもの)という、現代の神社建築にも見られる特徴があり、神社建築の源流が古く遡ることを知ることができる。

本例は、外部から目隠しをされた神聖な建物を現しているものと考えられる。

[平二〇モズサ〇六五〇一ほか]

円形埴輪の出入口部（内側から）

円形埴輪の出入口部（外側から）

40、42 馬形埴輪 頭部・鞍部

三点(書陵部)

大阪府堺市 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵

土製 長三一(出品番号40) 長三五(同41)

長七五(同42)

古墳時代

ウマの形をした埴輪の、頭部と背中の部分である。いずれも注目されるのは、写実的な馬装(ウマを操るため、馬体に装着する各種の部品のこと)の表現である。

頭部(出品番号40・41)では、面繫と呼ばれる、頭にまわす、ベルトと金具からなる馬装が表現されている。しかし、轡や手綱は表現されておらず、本例は、通常の乗馬用のものとは異なる馬装であったと思われる。

背中(出品番号42)では、鞍とその周辺の部品と、尻にまわされるベルトである尻繫が表現されている。鞍では縫い目、尻繫ではベルト連結部の折り返しや杏葉(尻繫にぶら下げる飾板のこと)の鉞まで表現されている点が注目される。

本例は、馬形埴輪としては初期の事例であり、その写実性から、我が国へ乗馬の風習が伝わって以降の早い段階での馬装を知ることができる、重要な資料である。

〔頭部…書五〇、鞍部…書四九〕

埴輪について

埴輪は、古墳の上や周囲に立て並べられた土製品である。古墳時代の初めから終わり頃まで、およそ三〇〇年間作り続けられ、その間に、作られる種類が増加することが知られている（括弧内の数字は出品番号を表す）。

★埴輪の種類

埴輪の種類は、大きく、円筒埴輪と形象埴輪に分けられる。

○**円筒埴輪** 古墳時代の始まりとともに、最初に出現した埴輪で、最も数多く並べられた埴輪でもある。

円筒埴輪（普通円筒埴輪） 土管のような形状で、もともとは、壺などの容器を載せる台（器台）を模したものである（32・33・35）。

朝顔形埴輪 上部がラッパのように開く形のもので、器台に壺を載せた状態をかたどったものである（34）。壺形埴輪（30・31）を含め、弥生時代に墳墓で行われていた祭祀に用いられていた土器をルーツとする。このため、壺形埴輪も円筒埴輪の仲間に含まれることがある。

○**形象埴輪** モデルとしたものにより、さらに分類することができる。

家形埴輪 家の形をした埴輪である（39）。塀や柵などの建築物をモデルとした埴輪も仲間といえる（38）。家形埴輪は、古墳時代前期の中頃には出現している。

器財形埴輪 矢を入れる道具である鞞（36）のほか、盾や甲冑、大刀などの武器・武器、貴人にさしかける日傘である「蓋^{きぬがさ}」など、様々な器財をかたどったものである。盾形埴輪や蓋形埴輪が古墳時代前期後半に出現した。

人物形埴輪 人の形をした埴輪で、巫女や貴人、武人、力士、馬飼などの種類がある。古墳時代中期の中頃に加わる。

動物形埴輪 ニワトリ、ウ、ハクチョウやカマなどの鳥類や、ウマ（40・42）、イヌ（43）、イノシシ、シカなどの獣類をかたどったものがある。鶏形埴輪は、古墳時代前期の中頃には現れているが、その他の動物形埴輪は、中期の中頃に出現する。

ここで例示したもの以外にも、多くの種類の形象埴輪がある。

43 犬形埴輪 頭部

大阪府堺市 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵 土製 高二八・五 古墳時代

一点（書陵部）

これまで長らく、イヌの形をした埴輪の頭部として紹介してきたものである。しかし、他の犬形埴輪と比べると首が長いこと、また、犬形埴輪によく見られる首輪の表現がないことなどの点から、近年、雌のシカの埴輪ではないかとの指摘がなされている。

いずれにせよ、出品番号40・42と並んで、獣の形をした動物形埴輪としては初期のものであるという評価に変わりはなく、口先のとがった頭部の形状を、非常に写実的に作り上げている。

〔書五〇〕

（書陵部 墓課・有馬 伸）

44 須恵器甕かぶ

一点(書陵部)

大阪府堺市 仁徳天皇百舌鳥耳原中陵

土製 高六二・七

古墳時代

本資料は、仁徳天皇陵の東側造出し、周濠との境近くで採集された須恵器の甕である。東側造出しでは、本品のほかにも甕の破片が採集されていることから、造出しの上には複数の甕が置かれていたことが知られている。

須恵器は、朝鮮半島からの技術による窯で焼かれた土器で、それまで使われていた褐色の土器、土師器はじきとは異なって硬く灰色のものが多い。甕は、須恵器のなかでも最も古くからある器種である。

胴部には、外面に細かい平行の線が多く見えるが、これは形を整えるために木製の板で叩いた跡である。本品のような平行の叩き跡は、新しい時期にはない古い甕の特徴の一つである。また、成形のため外から板で叩くにあたって、内側から柔さえる道具の跡もうっすらと残るが、基本は粘土が柔らかいうちに跡を指で撫で消している。このこともまた古い甕の特徴の一つで、新しい時期の甕は、内側の跡を撫でて消すことはない。

また、口縁部を見ると、尖った端の下に突帯が付いている。本品より古い甕は、口縁部が丸身を帯びていて、新しい甕は、口縁部を上下につまみ上げるような形状のものが多く、甕は一見すると形が単純で、時が過ぎてもあまり変化のない器のようである。しかし、実際には述べたように細かいところで少しずつ時期ごとに変わっていて、遺跡の年代を知るうえで重要な遺物となっている。

〔平一〇二ント〇五〇一―三三〕

45 須恵器杯蓋

一点(書陵部)

出土地不明 土製 幅二・三 古墳時代

本資料は、出品番号46の高杯の杯部とほぼ同じ形の杯身と組み合う杯蓋である。このような形の杯蓋は、須恵器が日本で生産されるようになって、少し経ってから出現し、古墳が造られなくなる直前、飛鳥時代後半頃まで使われる。杯は古墳だけでなく集落からも多く出土し、須恵器のなかでもっともポピュラーな器である。

上部には、ロククロの回転力を使ってヘラのような工具で余分な粘土を削った跡が残る。こうした整形は、新しい時代になるほど省略されていく。本資料と同様の杯蓋が使われなくなる頃には、ヘラで上部を削るものはなくなってしまう。また上部から下部の中間に段差があるが、このような形状も新しい杯蓋にはみられない特徴である。(M四)

46 須恵器高杯

一点(書陵部)

出土地不明 土製 高八・八 古墳時代

本資料は、本来つまみのついた蓋と組み合う高杯である。このような形の高杯は、古墳時代でも中頃に多いが、本品はそのなかでも小型化が進んだ新しい時期のものである。ものを入れる杯部と短い脚部を粘土が柔らかいうちに接合して作られている。

脚部には、三方向に透かし孔がある。口の部分はほぼ垂直にのびていて、同時期の杯身も同様の形である。脚部はロククロを使って、撫でて整形しているが、杯部の下半分は出品番号45の杯蓋上部と同じく、ロククロを使ってヘラのような工具で整形している。

同じ形状の高杯は、畿内で大型の前方後円墳の埋葬施設に横穴式石室が採用されるようになると、副葬品に全くみられなくなり、新しい形の高杯が出現する。

(M四)

前列高杯蓋、後列左から甕・杯蓋・杯身

47 須恵器一括(杯身・杯蓋・高杯蓋・甕)

四点(書陵部)

朝町村(現奈良県御所市)

土製 高一八・二(甕)

古墳時代(飛鳥時代)

本資料は、朝町村(現奈良県御所市)で出土したものである。本品の登録時には出土地が「浅町村」とされていたが、その後の調査により「朝町村」の誤記であることが判明した。このうち、坏身・坏蓋については出品番号45・46のもの比べてやや新しいもので、器径が大きくなっている。高杯蓋と甕はほぼ同時期のもので、杯身・杯蓋よりも半世紀以上新しいものである。これらのうち、甕は巫女形埴輪において、甕形のもを捧げ持っている例があることから、日常生活で使う器ではなかったようである。古墳や祭祀の場などで、正面の孔に植物質の管をさして、酒などの液体を飲むことに用いられたと考えられている。

〔官二八〕

48 須恵器壺・器台

一点(書陵部)

出土地不明
土製 高三四・八
古墳時代

本資料は、器台の上に別の壺が載っているように見えるが、実際は器台の杯部に底はなく、もともと一体のものとして作られている。表面の一部には、赤色顔料が付着している。これは器台の破断面にも付着しているため、意図して付けられたものかは不明である。また、表面に残るくすんだ緑色の部分は、自然釉といって、焼成の際に偶然付いたものである。壺の口縁部は丸身があり、頸部には二条の凸帯を二段設けて、隙間に波状文を施している。壺の丸い体部には、板で叩いた跡と回転力によって付いた整形の跡が残る。器台部分はほとんど残っていないものの、ほぼ垂直に下へのびることから、長脚の器台であることがわかる。

〔E五一一一〕

49 須恵器提瓶

一点(書陵部)

福岡県朝倉郡
土製 高三二・七
古墳時代

丸い体部に鉤形の取手がついた提瓶である。表面には、ロクの回転力によって付けられた同心円状の跡と波状の跡が残る。口の部分はやや丸味が残り、取手の鉤部分が角張っていないことから、鉤形取手が付く提瓶のなかでは古相のものである。用途としてはその形状より、水などの液体を入れて使われたと考えられる。取手の部分に紐をかければ、現代の水筒のように肩にかけて持ち運んで使うこともできたと思われる。しかし、かけてみるとかなり重いうえに厚みがあつてかさばる。実際そのように使うにはやや不便であることから、この提瓶は腰や馬にくくりつけられた可能性や、生者ではなく死者のための水筒と考えることもできる。

50 須恵器・土師器一括

(須恵器杯身・杯蓋・高杯・壺蓋・脚付壺・子持台付壺・子持装飾台付壺・子持装飾台付壺蓋・土師器壺)

九点(書陵部)

京都府京都市 入道塚陵墓参考地(入道塚古墳)

土製 高一九・七(土師器壺)

古墳時代(飛鳥時代)

本資料は、京都府京都市の入道塚陵墓参考地より出土した土器の一括品である。須恵器のほか、弥生土器の系譜をひく軟質で褐色の土器、土師器も出土している。それぞれほぼ同時期のものである。このうち、杯身・杯蓋については、ロクロによるヘラ削り整形の範囲が前代のものより狭く、器径も前代のものに比べて小さくなっている。高杯は、杯部下半分に装飾が施され、脚部に二方向の長方形透かし孔がある。本品は、前代までの高杯と比べて脚部がやや短くなっている。また脚部の透かし孔は、前代まで三方向のものが多く、本品の頃には二方向のものが多くなる。壺蓋は、その形と大きさから、壺のなかでも脚付壺の蓋と考えられる。つまみの部分が平らで、同時期の高杯蓋のつまみ部分とよく似ている。脚付壺は、やや広口の口縁部とハの字形に下方へ開いた短い脚部が特徴的な、この時期に多い形のものである。脚部の透かし孔は、三方向にあいている。

土師器壺は、長い頸部と丸い体部からなる。須恵器では、この時期から前代より明らかに長い頸部をもつ壺が出現し、それまでの土師器にも長頸の壺がないことから、本品は長頸の須恵器壺の影響を受けて作られたものと考えられる。ただし、整形方法は従来の土師器制作で使われてきたものを踏襲していることから、あくまで形を真似て作ったものである。

子持台付壺・子持装飾台付壺・蓋については、造形的にとくに優れたものであるので、次頁で個別に紹介する。

[昭三三ニユウ〇二〇七一ほか]

50-1 須恵器子持台付壺

本資料は、台と壺が一体の形状となった子持台付壺である。欠ける部分がほとんどなく、いわゆる完形品である。壺の肩部に付いた四つの小さな長頸壺のことを指して、子持ちと呼んでいる。

壺の部分には、頸部に二段の筋状の装飾と体部中央に列点状の装飾が認められる。壺の下半分は、ロクロを使って整形されたヘラ削りの跡が明瞭である。壺肩部の小さな子壺は、当時のミニチュアではない長頸壺の形を比較的忠実に再現している。

台の部分には、ほぼ垂直な基部とその上に台形および長方形の透かし孔がみられる。台部と壺部の境には、帯状の粘土が取り巻いている。こうした台部の特徴は、同時期の器台の脚部と共通する部分が多い。

本品の表面では、暗緑色のガラス質のものが光沢を放っている。それは、部分的に流れるように垂れていて、そうなることを意図して作られた陶芸作品のようでもあつて美しい。しかし、これは自然釉といって、須恵器を焼く際、植物性燃料が燃えた後の灰が高温で融けて、須恵器の表面に偶然付いたものである。

50-1 須恵器子持台付壺

50-2 須恵器子持装飾台付壺・蓋

本資料は、本来台と壺が一体の形状となった子持装飾台付壺と蓋である。壺の底部に残る跡から、もともとあつた台部が欠けていることがわかる。壺の装飾とは、壺の肩部に付いた三つの小さな動物形のことを指し、子持の子というのは、壺の肩部に付いた三つの小さな長頸壺のことを指している。この小さな長頸壺と壺部は、胎土・色調・焼成ともにもう一点の子持台付壺と同様である。壺の肩部についた小さな長頸壺は、子持台付壺のものと大きさ・形ともに良く似ている。同じく肩部についた動物形のもは、一見すると馬のようにもみえるが、元の形よりだいたいデフォルメされてしまったせいか、これが何をモチーフにつくられたものか、断定するのはむずかしい。

蓋について、蓋の装飾とは、蓋の上部に付いた三つの小さな動物形のことを指し、子持の子というのは、蓋の中央部に付いた小さな壺のことを指している。装飾の動物形のもは、壺のものと良く似ている。中央の小さな壺は、通常の壺をそのまま縮小したかのようで、前代より小型化しつつも装飾が残る当時の壺の特徴をよく表している。

50-2 須恵器子持装飾台付壺・蓋

前列左から土師器甕・杯蓋、後列左から壺・甕2点

51 須恵器・土師器一括

(杯蓋・壺・甕・土師器甕)

五点(書陵部)

京都府京都市 円山陵墓参考地(円山古墳)
土製 高一〇・二(土師器甕)
古墳時代(飛鳥時代)

本資料は、京都府京都市の円山陵墓参考地より出土した土器の一括品である。須恵器と土師器がある。出品番号50の入道塚陵墓参考地出土資料と比べると、こちらの方が全体的に若干新しい資料である。まず、杯蓋は上部につまみがつくもので、平底の杯身が本来組み合うものである。この杯蓋はその大きさや形状からみる限り、同種のものなかでも古相を呈している。壺は頸部に裝飾が残るものの、前代に比べて裝飾性が乏しくなっている。甕は、大きい方の底部に剥がれた跡があることから、おそらく本来は子持器台の上部にのっていたものと考えられる。小さい方の甕は、裝飾が彫刻化しており、甕のなかでは新相のものである。土師器甕は容器としてはかなり小型で、実用品ではなく、副葬用の土器であろう。

[昭三三マルヤ〇二二二一ほか]

52 須恵器一括(須恵器杯身・杯蓋・高杯)

八点(書陵部)

京都府京都市 泉山陵墓地飛地い号(本多山古墳群)

土製 高四・〇〇四・一(杯身)

古墳時代(飛鳥時代)

本資料は、京都府京都市の泉山陵墓地内にある本多山古墳群泉山支群二号墳より出土した土器の一括品である。それぞれほぼ同時期のもので、出品番号50の入道塚陵墓参考地出土須恵器と同じ頃のものである。

杯身・杯蓋は、前代のものよりも全体的に小型化し、整形についてはロクロの回転力を使った上部と底部のヘラ削り範囲が狭くなるなど、省力化が進んだ時期のものである。杯身のうち、灰白色の二点については、窯で焼かれる際の窯内部の酸素量や窯内部温度の関係で、須恵器本来の灰色で硬質な焼きにならなかったものと考えられる。

高杯は、二点とも長い脚部に通常の杯身と比べてやや大ぶりの杯部がのつた形のものである。こうした形の高杯には、頂部に平坦なつまみのついた蓋が組み合うのが通例であるが、ここでは出土していない。

高杯の脚部には、二点とも二段に二方向の長方形透かし孔がある。本品は、前代までの高杯と比べて脚部がやや短くなっている。また脚部の透かし孔は、前代まで三方向のものが多いが、本品の頃には二方向のものが多くなる。脚部の下端をみると、端が斜め上方方向にシャープに尖っていて、これもまたこの時期の特徴の一つである。

〔八四SZ一〕

53 須恵器壺

一点(書陵部)

出土地不明(福岡もしくは東京か)

土製 高七・四

古墳時代(飛鳥時代)

表面に印刻の裝飾が施された手にのるサイズの小型壺である。口縁部はやや丸味を帯びていて、外面は底部以外、ロクロを使った撫でによって丸く整形されている。このような壺の底部については、ロクロを使ったヘラ削りで整形される例が多いが、本資料の底部は、ロクロを使わずに余分な粘土を削った跡が残る。表面のうっすらとした光沢は、薄い自然釉によるものである。

本資料を特徴付けているのは、体部上半に残る印刻の裝飾である。花のような二重の凹文が不規則に多数散りばめられている。二重凹文の大きい方は、線ではなく列点によって表されている。二重凹文と列点を両方使う裝飾は、通常の須恵器には全くみられないものである。

国外の例をみると、こうした裝飾は新羅の土器に多く、本資料も新羅土器の影響を受けたものと考えられる。本資料は、胎土分析をおこなっていないため、須恵器ではなく、新羅土器そのものという可能性もある。ただし、器の形は須恵器によくみられるもので、通常の須恵器では二重凹文が器面に規則的に配置され、二重凹文の大きい凹が列点ではなく線で表現されることから、ここでは須恵器として紹介しておく。

新羅土器については、二重凹文の周りを複数の半円と点で囲み、花のような文様に仕上げたものもみられる。本資料の文様は、そうした物と比べると、半円と点の部分が省略され、二重凹文の大きい部分を列点で表現することによって花のようにみせているかのようである。

54 須恵器壺・壺蓋

一点(書陵部)

奈良県奈良市 大和四号墳

土製 高一四・九

奈良時代

偏平なつまみの付いた蓋と肩が張った形の体部に高台が付いた壺のセットである。こうした形の器は、奈良時代の地鎮遺構などのほかに墓より出土することが多く、その内側には火葬された骨が納められている場合がほとんどである。骨が納められたものが多いこと、古墳から出土していることから、火葬骨が残っていないものの、骨を納めた蔵骨器として使われた可能性が考えられる。本資料は、体部の張りが高い位置にあることから、須恵器製蔵骨器のなかでも比較的古相のものである。蔵骨器を墓に納める場合、そのまま土に埋納するのではなく、石製の外容器や土器などで覆った状態で埋納される場合が多い。〔昭一〇ヤマト四〕

人物像正面

参考資料
愛媛県松山市桜谷古墳1号墓出土
須恵器装飾(人物像)
松山市教育委員会編1973『天山・桜谷遺跡発掘調査報告書』の写真をトレース

55 須恵器装飾(人物像)

二点(書陵部)

愛媛県大井(現今治市)
土製 高五・一〇五・七
古墳時代

装飾須恵器の装飾部(人物像)二点である。もともとは、須恵器のなかでも、器台のような脚部と広口壺が一体となった台付壺の壺肩部に付いていたものの可能性がある。二点とも人物の目と鼻を刺突で表し、口は横に線を引いて一文字である。頭部側面に残る粘土塊は、古代男性の髪形である「みずら」を表現したものと考えられる。本資料は「みずら」が肩まで垂れ下がっているようにみえることから、労働には適さない「下げみずら」を表している、モデルとなった人物の身分が窺える。二点とも背には手と思しき表現があるが、これはその位置から自らの手ではなく、他の人物像が組んだ手と考えられる。本資料のように人物像が組み合った装飾は、相撲の場面を表したものとも考えられている。〔陵一三八〕

人物像側面

須恵器の変化とその意味

須恵器は、朝鮮半島から伝わった技術によって日本で生産された土器である。最近では四世紀に遡るものもあるのではないかとされているが、五世紀頃から生産が本格化したことは間違いない。今回の展示品は、五世紀から八世紀にかけての須恵器である。各時期の須恵器とその変化について、展示品を中心に概要をみてみよう。

5世紀 この時期の須恵器は、最初期には甕や器台が多く生産され、前半には同じ器種でもさまざまな形のがみられる。しかし、後半になると高杯など同じ器種の場合、形がほぼ統一され、定型化する。出品番号44の甕は、口の形状から形が統一される直前頃のもので、出品番号45・46の杯蓋と高杯は、小型化が進んでいることから、定型化が完了した後の時期のものである。五世紀前半頃の杯は平底のものが多く、後半には平底のものは少なくなる。

6世紀 前代まで流行した出品番号46のような器形が廃れる一方で、新しい器形が多く出現する時期である。畿内地域における大型古墳の埋葬施設をみても、それまで多かった堅穴系の埋葬施設から、横穴系の埋葬施設へと変化が著しいことがわかっている。

新しい須恵器では、出品番号55の装飾と同様の人物像や動物像が付いた装飾台付壺や、出品番号48の器台と同じく脚部上半がほぼ垂直の器台が出現する。高杯の脚部と甕の頸部は、その形状変化が連動しているようで、双方新しくなるほど伸びていく。

また、出品番号45と出品番号47の杯の大きさを比べても明らか通り、六世紀前半には杯の大きさが、五世紀末頃よりも大きくなるのがわかっている。六世紀には、短頸壺や壺に平底のものが出現することから、杯はただ横に大きくなっただけでなく、平底を意識して器形が変化したとも考えられる。しかし、六世紀後半には平底のものはほとんどみられなくなり、あまり普及はしなかったようである。

7世紀 畿内では大型の前方後円墳に代わって、方墳や円墳などが築かれ

るようになる時期である。出品番号51の杯蓋にともなう平底の杯身は、この時期から作られるが、丸底の杯も後半までは残る。杯の大きさは、前半から後半にかけて小さくなり、後半に入って丸底の杯が無くなってからは、今度は大きくなるのが明らかになっている。杯だけでなく、出品番号51・52のような高杯や甕についても同様に小型化し、装飾も省略され、甕と器台は丸底の杯とほぼ同時期に作られなくなる。その後、ほどなくして畿内では群集墳の築造が終わり、八角形墳など一部の古墳が造られるのみとなる。

また、この時期には、新羅の土器が各地から出土している。新羅の影響を受けた出品番号53の壺からも、この時期の対外交流の一端を知ることができる。出品番号50のような装飾須恵器は、六世紀後半には少なくなっていたが、七世紀前半に再び多く作られるようになり、後半には姿を消す。

8世紀 この時期は、七世紀後半から続いて、平底や高台の付いた杯の大きさにいくつかの規格がみられる。後半からは器の大きさが小さくなり、出土土器に占める須恵器の割合も減るようである。

八世紀は、古墳が造られなくなり、火葬が普及する時期でもある。出品番号54のような壺は、火葬の普及にともなって出現した器で、火葬骨を納める蔵骨器として使われたものがほとんどである。

各時期の須恵器の変化をみて興味深いことがある。五〜六世紀の前半には、平底の器が出現しても、後半には丸底になってしまうことである。それに対して、七世紀に現れた平底の器は、丸底の杯がなくなっても残り続ける。このような違いが生じる背景には、五〜六世紀は前方後円墳が造られるのに対して、七世紀は代わって方墳が築かれるようになることが関係するのかもしれない。すなわち、七世紀の変化は器という生活面だけでなく、宗教や墓制も含めた新しい文化の広範な受容を表す可能性がある。

(書陵部陵墓課・横田真吾)

本展出品の須恵器の時代変遷

大阪府堺市仁徳天皇陵 須恵器甕【出品番号44】

不明 須恵器杯蓋【出品番号45】

不明 須恵器高坏【出品番号46】

奈良県御所市 須恵器杯身・杯蓋【出品番号47】

愛媛県今治市 須恵器裝飾(人物像)【出品番号55】

不明 須恵器壺・器台【出品番号48】

福岡県朝倉郡 須恵器提瓶【出品番号49】

京都府京都市入道塚陵墓参考地 土師器・須恵器【出品番号50】

京都府京都市泉山陵墓地 須恵器【出品番号52】

奈良県御所市 須恵器甕【出品番号47】

京都府京都市円山陵墓参考地 土師器・須恵器【出品番号51】

不明(福岡県もしくは東京都) 須恵器壺【出品番号53】

奈良県奈良市大和4号墳 須恵器壺【出品番号54】

III 金属の造形

金属は、石や土と比較して、もっとも新しく人間が利用するようになった素材といえます。現代の生活において金属の存在は不可欠なものとなっていますが、古墳時代までの日本の人々にとっては、国内で鉱石の採掘や精錬が行われていなかったため、朝鮮半島などからの輸入に頼る金属は貴重な存在でした。ここでは、主に金、銅、鉄を用いて、当時の金工技術の粋を集めて作られた様々な造形を紹介します。

56・57 流水文銅鐸

二点〔書陵部〕

奈良県天理市

青銅製 高六〇・八（二号銅鐸）

弥生時代

銅鐸は弥生時代を代表する鑄造の青銅製品で、鳴らし
て使用された祭器と考えられる。右側が一号銅鐸、左側
が二号銅鐸とされている。この二点の銅鐸の出土地は、
現在、西名阪国道の天理東インターとなつている付近の
丘陵上で、西側に眺望の開けた場所に位置しており、周
辺地域の呼称に由来して「石上銅鐸」と呼ばれることもあ
る。これらは明治十六年（二八八三）とその翌年に相次いで
発見されたもので、その出土地は十五mほどしか離れて
いなかったという。一号銅鐸、二号銅鐸ともに本体には
流水を表現したような文様帯がみられ、それが呼称とし
てもちいられている。

この二点の銅鐸で注目される点は、二号銅鐸の上部（鈕
と呼ばれる部分）に二人の人物が表現されていることであ
る。この二人の人物はそれぞれ盾と戈と思われる武器・
武具類を手にしており、戦闘の場面を表現したものと
も、祭礼の場面を表現したものととも想像されるが、確定す
るのは難しい。いずれにしても、弥生時代人の世界観を類
推するうえで重要な資料といえる。〔書二九三・二九四〕

57 2号銅鐸

57細部

58 銅矛

一点〔書陵部〕

愛媛県四国中央市
青銅製 長三二・一
弥生時代

銅矛は、銅鐸とともに弥生時代を代表する鑄造の青銅製品で、武器形の祭器と考えられている。宮内庁が管理する妻鳥陵墓参考地に隣接する春宮神社の敷地内を整備した際に発見された箱形石棺から出土したものである可能性が高いものの、慎重な意見もある。

この銅矛はいわゆる中広形銅矛とされるもので、弥生時代中期後半につくられたものと考えられる。関から袋部にかけて欠損しており、本来、柄が差し込まれていたはずの袋部内には土と思われる鑄型が除去されずに残っていることが観察できる点は注意される。
〔陵六九〕

59

画文帯環状乳神獸鏡

一点〔書陵部〕

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)
青銅製 径一三・二
中国 後漢

中国の後漢代に鑄造された青銅鏡である。鏡背面の中央に鈕(紐を通すつまみ)を配し、その周囲に主文様となるそれぞれ四体の神像と獸像がみられる。この環状乳神獸鏡の名称は、獸像の背に神像が座る構図となるもので、獸像の肩と腰を環状の突起(乳)で表現することに由来している。

〔官六三〕



60

飛禽走獸文鏡
ひきんそうじゅうもんきょう

一点(三三の丸高蔵館)

出土地不明

青銅製 径二一・五

中国 魏

中国の魏において鑄造された青銅鏡である。出土地は不明であるが、旧所蔵者が最後の高知藩主であった山内豊範であり、明治八年(一八七五)に皇室によって買い上げられたことが判明している。

鏡面がきつく反った凸面鏡であり、鏡背面には鈕(紐を通すためのつまみ)が中央に配され、その周囲に神仙世界が表現されている。一段高くなっている外周(外区)には光線を表現したと思われる鋸歯文を三重に配し、一段低くなったその内側には半円方形帯が配され、方形の中には銘文が記されている。さらにその内側には内区の主文様がみられる。内区は六つの半球形の乳(突起)によって区画されており、各区画に飛禽走獸文がみられる。

本鏡は初期の三角縁神獸鏡と密接な関係があることが指摘されており、三角縁神獸鏡の成立過程を考えるうえで重要な資料といえる。なお、同範鏡(同じ文様の鏡)が岡山県郷観音山古墳から出土している。

61 三角縁龍虎鏡

一点(書陵部)

群馬県富岡市 北山茶臼山古墳

青銅製 径二四・九

中国 魏

中国の魏において鑄造された青銅鏡である。龍と虎という獣像のみを内区の主文様として表現した鏡であり、神像が表現されておらず、三角縁神獣鏡のなかでは比較的数の少ないものといえる。内区は周囲に珠文をもつ四つの乳で区画されており、各区画に一頭ずつ龍もしくは虎が配されている。そのうち、体部が斜格子文で充填された獣像の脇には「龍」の榜題が記されている点は注目される。

内区外周には車馬、羽仙、魚なども表現されており、他の鏡種(特に画像鏡)との関係が色々とうかがえる。

本資料の同範鏡(同じ文様の鏡)は滋賀県大岩山古墳出土鏡、岡山県湯迫車塚古墳出土鏡などほかに四面がしられている。〔陵七八〕

62 三角縁三神二獸博山炉鏡 一点〔書陵部〕

奈良県北葛城郡河合町 佐味田貝吹古墳

青銅製 径二一・六

中国 魏

中国の魏において鑄造された青銅鏡である。内区の外周に複線波文があることから、三角縁神獸鏡のなかでも「波文帯鏡群」と呼称されるまともりに属する鏡である。この波文帯鏡群はいわゆる舶載三角縁神獸鏡のなかでは製作時期が新しく位置づけられるものである。

内区の主文様として神獸像のほかに、博山炉（中国古来の香炉の一種）がみられる点特徴といえる。また、鑄造時に欠陥があったためか、神像二体の鑄上がりが非常に不鮮明となっている。この方向に湯口があったものかもしれない。

同範鏡は奈良県佐味田宝塚古墳出土鏡、岡山県田邑丸山二号墳出土鏡、岐阜県田満寺山古墳出土鏡などほかに六面がしられている。

〔官一三二〕

63 三角縁三神三獣鏡

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)

青銅製 径二一・五

中国 魏か

いわゆる「仿製」三角縁神獣鏡に属するものである。その製作地については意見の一致をみないが、中国製である可能性が高い。内区は円錐形の六つの乳によって区画されており、各区画にそれぞれ神像と獣像が一体ずつ交互に計三体ずつ配されている。その外周には獣文帯ともいわれる双魚、蟾蜍(ヒキガエル)などの獣像を配した文様帯がみられる。

[官七二]

64 方格規矩四神倭鏡

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)

青銅製 径二九・二

古墳時代

古墳時代前期の日本列島内で鑄造された大型の青銅鏡である。鏡背面にあらわされた文様は、中国の方格規矩四神鏡を模倣したものと見える。しかし、本来あらわされるべき方格(方形の区画)内の十二支の文字や四神(青龍・白虎・朱雀・玄武)像は、それらしく模倣されているものの、神仙思想にもとづく図像や漢字を理解して表現したものではないことが見て取れる。

[官六一]

65 直弧文鏡

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山)

古墳)

青銅製 径二八・〇

古墳時代

古墳時代前期の日本列島内で鑄造された青銅鏡である。鏡背面に直線と弧線を組み合わせた日本の古墳時代特有の文様である直弧文を内周(内区)と外周(外区)の二重に配した特徴的な鏡といえる。類品は本鏡とともに出土したもう二面などがある。

これらの鏡にみられる直弧文のデザインは秀逸で、現代においてもしばしば転用されることがある。こうした日本特有の直弧文を配する一方で、鏡背面の中央にある鈕(紐を通すためのつまみ)のまわりにみられる文様(四葉座)や内外区のあいだに配された八つの花文(弧文)から中国に起源をもつ内行花文鏡(連弧文鏡)の影響をみとることができる。ただし、本鏡の八花文は花文の一位位ごとで内区に近い部分に突出した箇所があり、単純な弧線を描くわけではなく独自のアレンジが加えられている。そうした点においても日本独自の文様をもった鏡といえる。

(官五三)

66 神人車馬画像倭鏡 一点〔書陵部〕

奈良県北葛城郡河合町 佐味田宝塚古墳

青銅製 径二〇・八

古墳時代

古墳時代前期の日本列島内で鑄造された青銅鏡である。鏡背面にみられる文様は、同じ佐味田宝塚古墳から出土している中国製の「神人車馬画像鏡」（東京国立博物館蔵）を手本にしながら模倣したものと考えられる。

原鏡とその模倣鏡が同一古墳に副葬されていたことになるため、国内における鏡の生産と授受の過程を考えるうえで重要な資料といえる。同様に神人車馬画像鏡を模倣したと考えられる類似鏡は岡山県正崎二号墳などでも確認されている。

〔陵一四〇〕

67 家屋文鏡

一点(書陵部)

奈良県北葛城郡河合町 佐味田宝塚古墳

青銅製 径二・九

古墳時代

古墳時代前期の日本列島内で鑄造された青銅鏡である。鏡背面の主文様として、それぞれ異なる四棟の建物が表現されており、希有なものといえる。古くから、考古学だけでなく建築史や美術史などの分野においても極めて有名な鏡である。

この四棟の建物を何とみなすかについては諸説あるが、古墳時代における首長居室との関連も指摘されている。また、建物以外にも蓋、鶏、樹木などが表現されており、当時の倭人の世界観を考える上でも重要な鏡といえる。

なお、近年、X線透過撮影をおこなった結果、これまで雷とされてきた文様がそうではなくなる可能性や、それに付随する神像が鮮明に観察できるようになった(左図参照)。

本鏡には布が付着していることから副葬時には布に包まれていたものと考えられ、分析結果によれば、この布は一種類の平絹であった可能性が高いと考えられている。

〔陵九九〕

神像1

神像2

68 旋回式獣像鏡

滋賀県長浜市 垣籠古墳
青銅製 径一四・一
古墳時代

一点(書陵部)

古墳時代中期から後期にかけて日本列島内で鑄造された青銅鏡である。本鏡は全体的に土や銹などが付着しているため、鏡背面の文様を肉眼で観察することは難しい。しかし、X線透過画像によってその詳細を把握することが可能である。本鏡には主文様として五体の獣像がみられる。なお、全体的な形状は古墳時代の鏡に特徴的な凸面鏡とはなっておらず、土圧などでゆがんでしまったのか、水平に近い状態になっている。

[陵一九八]

69 瑞獸鏡

出土地不明
青銅製 径二一・三
中国 宋

一点(三の丸尚蔵館)

宋代の中国において、唐代の鏡をもとに鑄型の範をおこして(踏み返し技法)、文様の一部を改変して鑄造した青銅鏡と考えられる。踏み返し鏡と判断する根拠は、鈕孔周辺の造作である。原鏡の製作時期は唐代の初め頃と推測される。

内区には四体の瑞獸が配されている。また、瑞獸の脇に「奉李大成」と記されており、奉納用に製作された鏡であったと推測される。内区外周には五言絶句の銘文が記されている。



70 馬形帶鉤・環

七点〔書陵部〕

岡山県岡山市 榊山古墳
青銅製 径五・六（環）
朝鮮半島 三国時代

三国時代の朝鮮半島において鑄造された青銅製品である。馬形帶鉤とは、馬をかたどったベルトのバックル状のものであり、中国北方の騎馬民族に由来することが指摘されることもある。馬形帶鉤の日本での出土例はとほしく、ほかに長野県浅川端遺跡からの出土例があるのみである。

〔陵二二三〕

71 馬鐸

二点〔書陵部〕

愛媛県四国中央市 妻鳥陵墓参考地（東宮山古墳）
青銅製 長一一・五（右）
古墳時代

古墳時代中期から後期に日本列島内で鑄造された青銅製品である。馬鐸とは、馬具の一種であり、飾り馬の胸繫などに装着して裝飾・音色効果が期待されたものである。この二点は「王」と「X」を組み合わせたような区画内に珠文を配しており、文様が酷似しているものの、完全に一致はしない。なお、これらの文様は鐸身の片面のみにみられ、反対面は無文となっている。当参考地からは計四点の馬鐸が出土するとともに、鹿角製と考えられる舌馬鐸の内部に吊つて、音を鳴らす部材）も一点みつかっている。

〔陵二〕



74 金銅製四環壺 一点(三の丸尚蔵館)

奈良県橿原市和田町、明日香村豊浦・雷

古宮遺跡

金銅製 高三六・五

飛鳥、奈良時代

鑄造によつて作られた青銅製の壺の全面に、鍍金を施している。現状では、緑青(銅から出る緑色の錆)に覆われている。本来は蓋があつたと考えられるが、現在には失われている。蓋は口をふさいだ後に、壺の肩につけられた四つの環におそらくは鎖を通して縛ることで、誰でもが開けられないように強固に閉じていたと考えられる。

本資料はやや扁平な球形の壺である。日本で出土している金銅製の容器の中では際立つた大きさで、中国と日本のどちらで製作されたかは不明である。外面には全体に文様が施されている。肩から胴部にかけては、流麗な唐草文と、緑青によりほとんど見えないが鳳凰と考えられる四つの鳥形文がある。そして、口縁部には雲形の文様、高台には草花形の文様が施されている。また、主体となる文様どうしの隙間は「魚子」と呼ばれる小さな円形文で埋め尽くしている。

出土状況は、水田の下から偶然に掘り出されたものであり、その後出土地の発掘調査も行われたが、詳細を明らかにするデータは得られなかったため、用途や性格については明らかでない。

しかし、際立つた大きさの金銅製の本体を、全面にわたつて彫金により装飾するなど、当時においても、また金工史上においても特筆すべき位置を占めるものであることは間違いない。

肩部～胸部の詳細

胸部下半魚子文の詳細

双龍環頭把頭そうりゅうかんとうつかがしら 一点〔書陵部〕

群馬県太田市 二ツ山古墳
金銅製 最大幅八・四
古墳時代

単鳳環頭把頭たんほうかんとうつかがしら 二点〔書陵部〕

京都府京都市
円山陵墓参考地（円山古墳）
金銅製 最大幅六・〇（右）
古墳時代

古墳時代後期の日本列島内において銅で鑄造した後に彫金をほどこし、さらに鍍金をおこなったものである。

把頭とは刀の部材であり、切先（刃部）とは反対側の端（茎部端）に刀の本体とは別造りで製作され、装着された装飾をさすものである。出品番号72は、やや横長な円形の環内に二匹の龍が向き合っており、玉をくわえていることが名称の由来となっている。〔陵二〇〕

出品番号73は、やや横長な円形の環内に鳳凰の頭部が表現されていることから名称がつけられている。〔昭三六マルヤ〇一〇三・〇一〇四〕

前列右から鉸具、円形把手付き座金具、帯先金具、中・後列は銚板

75 龍文透彫帶金具

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)
金銅製 長六・六(鉸具)
中国 晋

一四点(書陵部)

古墳時代前期における金銅製の帯金具である。鉸具・帯先金具・円形把手付き座金具・銚板からなり、残存状態は良好である。鉸具と帯先金具には龍文、銚板には三葉文(あるいは芝草文)が透彫りで形作られている。龍文は、走る龍の側面観を表したものであり、頭(眼、耳、鼻、齒、角)、体軀、肢、尾や毛の流れなどが蹴り彫りという彫金技術で表現されている。長い鼻が頭の向かいの芝草文と同化しているなどの文様の乱れも指摘されている。また、銚板の下には垂飾がつけられている。垂飾は他の金具と比べて分厚く、毛彫りという彫金技術で弧線が描かれている。

この帯金具は中国晋王朝において創り出された装身具である。晋王朝において帯金具は身分を表象する文物であり、このモチーフは主に將軍職などの武官が身に帯びたものであったと考えられている。当時の日本列島にはない毛彫りという技術が用いられていることから、晋の工人によって製作されたものであろう。日本列島での出土例は兵庫県行方古墳例と本品のみであり、珍しいものである。日本列島にみられる初期の金銅製品の一つである。〔官一〇五〕

透彫りと蹴り彫りで表現された龍文

愛媛県四国中央市 妻鳥陵墓参考地(東宮山古墳)
 金銅製 推定最大高一・二・四(帶部)
 古墳時代

古墳時代後期における金銅製の冠である。帶部左側と中央付近は残存しているが、その他の大部分は欠損している。本品は、帶部が広く二つの山をなす形態であることから広帯二山式冠と呼ばれている。中央付近には蝶の形をした金具が装着されている。このような形態は、織物製の鉢巻きが額の上で結ばれた様子を金銅板で表現したものであると考えられる。

帶部には、金銅板に透彫りを入れることで文様が表現されている。上縁と下縁には、波のような形を示す連続波頭文がみられる。帶部内側には、劍菱文が作られており、中には彫金で植物の葉のような文様が描かれている。これらの文様は、朝鮮半島中西部にみられた「百濟」の地に分布する冠の文様に由来するものであると考えられる。

また、帶部の表面には歩揺が多数装着されており、円形歩揺は劍菱文周辺に、魚形歩揺は連続波頭文形の周辺にまとまっている。魚形歩揺には、彫金で眼、口、鱗、鰭が詳細に表現されている。現在は銹によって動かないが、製作当時はこれらの歩揺は風に揺れて動いていたと考えられる。

波の上の魚、草の文様など、何らかの物語が示されているようにもみえる。同様のモチーフは同じ時期の金工品にも確認されており、当時の人々の思想が垣間見える。

〔陵二〕

連続波頭文

劍菱文

魚形歩揺

77 鳥形飾板

二点(書陵部)

実測図(原寸大)

長野県安曇野市 有明古墳群
金銅製 最大幅五・一(左)
古墳時代

長野県安曇野市に所在する有明古墳群(現在では穂高古墳群と呼ばれている)から出土した。明治二十年(一八八七)頃に宮内省によって買い上げられたものである。嘴、鶏冠、羽、脚の表現から、鳥を描いたものであると考えられる。顔の穿孔は、その位置からみて目を表現したものである。また、胴体の穿孔は二個対になっていることから、何かに吊されたか、結びつけられたものであろう。二点の飾板は形態がやや異なっている。右側の個体は脚を伸ばしており、空中で何かに捉まろうとしている姿を描いたものであると考えられる。左側の個体は、下側が欠損しているため脚の有無はわからないが、右側の個体と比べて上体が起きておらず、おそらく静止した状態を描いたものであると考えられる。同様の鳥の表現は、奈良県藤ノ木古墳から出土した広帯二山式冠にもみられる。 [陵一〇九]

78 垂飾付耳飾

二点(書陵部)

福井県三方上中郡若狭町 西塚古墳
金製 ガラス 長三・九(左)
古墳時代

古墳時代中期にみられる耳飾である。心葉形の垂下飾が一对残存している。上端近くに穿孔がみられることから、元々は鎖で耳環に垂下されていたのであろう。金無垢からなる贅沢なつくりであり、中央にはコバルトブルーのガラス玉が嵌め込まれ、垂下飾の先端には白玉状の環の下部に金粒四つが取り付いている。本品は、朝鮮半島南部の洛東江以西地域にみられた「大加耶」と呼ばれる地域から出土する耳飾と共通する点が見られることから、当地域に由来するものであると考えられる。

[陵一〇九]

79 耳環

二点〔書陵部〕

奈良県葛城市 小山古墳
銅芯鍍金か 縦一・七(左)
古墳時代

古墳時代中期から後期にかけてみられる耳環である。肉眼観察によると、銅芯に鍍金されたものであると考えられる。芯の断径は厚さ二ミリ程度で、八角形に面取りされている。二個体とも同じ大きさの芯が用いられているが、成形方法の違いか、やや形態が異なっている。

〔陵一一八〕

80 耳環

一点〔書陵部〕

兵庫県神戸市 玉津陵墓参考地(吉田王塚古墳)
銅芯金板張 横二・八
古墳時代

古墳時代後期に多くみられる耳環である。墳丘中から出土した埴輪との時期差が大きいため、当参考地から出土したものと確定することはできない。

破損箇所肉眼観察によると、芯は銅製でその上に金板が巻かれている。所々に金板の皺ができており、やや粗いつくりであるようにみえる。開口部の先端をよくみると、金板を折りたたんで処理していることがわかる。

〔陵一一六〕

81 耳環

一点〔書陵部〕

愛媛県松山市 波賀部大塚古墳
銅芯銀板張鍍金 横二・〇
古墳時代

古墳時代後期にみられる耳環である。破損箇所からみて、芯は銅製である。また肉眼観察によると、芯には厚みのある素材が巻かれている。外側は金色であり、その下側にはわずかに銀色を呈している箇所がある。これは銀板の上から鍍金されたものであると考えられる。現在は劣化してしまっているが、製作当時は銀と金を組合わせた独特の色合いを呈した装身具であっただろう。

また、同じ素材の小さな耳環が組み合わされている。このような事例はあまりなく、珍しい。

〔陵一一三〕

金工技術について

金や銀を用いた金工技術は、古墳時代に大陸から伝播してきたものであると考えられている。本展では、様々な技術で製作された金工品を紹介している。今は錆などによって劣化してしまっているが、よくみると部分的に当時の姿を保った箇所がある。ここでは肉眼観察で確認できる金工技術を詳しくみてみよう。

まずは、冠の魚形歩揺に注目する（出品番号76左下の写真）。これは、銅板の上に鍍金された金銅製である。鍍金（めっき）とは、水銀に金を混ぜてアマルガム状態にしたものを銅板の上に塗布し、加熱して水銀分を蒸発させることで、金を銅板の上に定着させる技術である。さらにその金銅板の上から、鑿を使った蹴り彫りという彫金技術を用いて、魚の目、鱗、鱗などを表現している。蹴り彫りとは三角形の鑿の打撃痕を連続して設けることで線のようにみせる彫金技術である。遠目にみると線にしかみえないが、目を近づけてよく観察すると、三角形の打撃痕を確認することができる。

次に、耳環をみてみよう。小さな装身具でどれも同じようにみえるが、全て異なる素材でできている。西塚古墳例は、金製であるとされる。肉眼観察では他の素材を組合わせているようにはみえない（出品番号78）。一方、小山古墳例も同じく金製にみえるが、開口部や内側をみると、鍍金が欠けてしまいい、地の色がみえてしまっている箇所が確認できる（下段写真の▲箇所）。これは銅芯に鍍金されたものであるとわかる。玉津陵墓参考地例をみてみよう。本品には破損箇所があるため、内部を詳しく観察することができない（下段写真の▲箇所）。芯には青錆が確認できることから、銅製である。またその外側には金板が巻かれている。鍍金とは違って金板には厚みが

あり、所々に金板の皺ができています。鍍金とはまた異なる技術である。最も多くの材質が組合わせられたと考えられるのは、波賀部大塚古墳出土例である。破損箇所をみると、芯は銅製の可能性が高い（下段写真の▲箇所）。また、外側には厚みのある素材が巻かれている。外側は金色であり、その下側にはわずかに銀色を呈している箇所がある。これは銀板の上から鍍金されたものであると考えられる。複雑な工程を経た技術であるが、同様の事例は古墳時代に多く確認されており、古墳時代の耳環にも用いられた主要な技術であったようである。

このように、様々な金工技術が観察できるのであるが、この背景には金が貴重なものであり、供給量が限られるため、金無垢の製品をつくれるだけの金を手でできなかったという事情があったようである。そのため、遠目に見ると金をふんだんに使っているようにみえるが、実際は外側だけを金にして内側は別素材にする技術が生み出されたのであろう。できるだけ金の使用を少なくしようという当時の製作工人の工夫を見て取ることができるのである。

なお、金工品の材質認定は全て肉眼観察によるものである。近年、蛍光X線分析を通じた成分分析や実体顕微鏡を利用して細部観察が進められており、このような機器を用いて分析をすればまた異なる結果が出る可能性もある。ただ、分析結果は観察者の目的意識次第で変化するため、このような肉眼観察が成分分析の出発点となる。破損面は勿論であるが、耳環の開口部といった製作工人がみられるとは予想していなかったであろう部分が観察のポイントである。

小山古墳

玉津陵墓参考地

波賀部大塚古墳

82・83 大鉄鋌・小鉄鋌

二二点(書陵部)

奈良県奈良市 宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号(大和六号墳)

鉄製 大鉄鋌・最長四〇・〇 小鉄鋌・最長一三・二

古墳時代

宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号からは、大鉄鋌二七四点、小鉄鋌六三五点が出土した。出土した鉄鋌の総重量は約一四〇キログラムにも及ぶ。

鉄鋌は多様な形態を呈しており、上下端部が直線的であるもの、曲線的に突出するもの、また曲線的に凹むものが確認できる。上下端部を折り返すことで、直線的な形にしたものもあることから、上下端部の形を意図的に表現していたと考えられる。

通常、古墳時代の鉄製品は長年の劣化によって錆び付いていることが多いが、本品は状態がきわめて良好であり、残りの良い個体は現在でも磁石がつくほどである。そのため、鉄鋌の製作時の情報を読み取ることができる。鉄鋌の表面では、鉄塊を鍛打して鉄板を作った際についたと思われる工具痕を確認することができる。大鉄鋌の中央付近には、鉄板が重なっている部分があり、大型の部材を複数鍛接することで形作られていることがわかる。また小鉄鋌は、縦長の部材を複数鍛接することで形作られているものが多い。どの個体も側面が大きく湾曲しており、大鉄鋌と比べて乱雑に作られている印象をうける。

鉄鋌は、朝鮮半島南部で多く確認されており、本品も朝鮮半島南部に由来するものである可能性が高い。鉄鋌の用途については議論が続いており、鉄素材とする説や、儀器とする説が提起されている。

〔昭二〇ウワナ二一ほか〕

大鉄錠

大鉄錠

小鉄錠

84 小札鉾留衝角付冑 こざねびょうりょうめしよかくつきがぶと 一点(書陵部)

福井県三方上中郡若狭町 西塚古墳
鉄製 復元長二八
古墳時代

古墳時代中期における鉄製の冑である。右側頭部と後頭部にかけて大きく欠損していたが、現在は保存処理をおこない欠損部を修復している。

地板に小札と呼ばれる小型の鉄板が用いられ、伏板、胴巻板、腰巻板に鉾を留めることで接合されている。衝角底板と腰巻板が同じ部材でつくられている点の特徴であり、同様の特徴をもつ冑は現在のところ確認されていない。

武器・武具の入手が重要視されていた時期のものであり、本品は被葬者の権威を示す器物として機能していたと考えられる。〔書九〕

85 横矧板鉾留衝角付冑 よこはぎいたびょうりょうめしよかくつきがぶと 一点(書陵部)

愛媛県四国中央市 妻島陵墓参考地(東宮山古墳)
鉄製 長二六・三
古墳時代

古墳時代後期における鉄製の冑である。腰巻板の一部が欠損するが、ほぼ完形である。

地板には横矧板と呼ばれる横長の鉄板が用いられ、伏板、胴巻板、腰巻板に鉾留されている。地板第一段、二段ともに横矧板二枚で構成され、後頭部中央に合わせ目をもつ。衝角底板は欠損しているが、残存部分からみて、腰巻板の内側から鉾留されていたと考えられる。〔書二六二〕



86 金銅装横刃板鉾留衝角付冑 一点二の丸尚蔵館

出土地不明

鉄地金銅張製 長二六・三

古墳時代

古墳時代の日本では、基本的に二種類の冑が使われた。ひとつが、本資料や出品番号84・85などの「衝角付冑」と呼ばれるものである(衝角とは軍艦の艦首のうち、喫水線以下の尖った部分を指す)。これまでの研究により日本在来の冑の形であると考えられている。もうひとつは、「眉庇付冑」と呼ばれるもので、実物資料ではないが、出品番号87の絵図に描かれた、野球選手がかぶるヘルメットのような形態の冑である(80頁の写真右)。眉庇付冑は、日本で製作されたものではあるが、大陸から将来された冑の影響を受けて製作された外来系の冑である。

これらの冑の材質は、大半が鉄のみで製作されたもので、一部に革製と考えられるものも知られている。

本資料は、金銅板(銅板に金メッキを施した、あるいは金箔を押した薄い板)を鉄板に被せて、きらびやかに装飾を施している点の特徴される。また、単に金で飾るだけではなく、タガネを用いた精細な蹴り彫りによって点を連続させることで、波形やまっすぐな線を刻み、歩揺と呼ばれる小さな飾り板(出品番号76・87参照)を多数取り付けていた痕跡が残っている点においても、極めて装飾性が高いといえる。このような冑は、数が少ないものの眉庇付冑を中心に知られており、外来系の冑に金銅装が施される傾向がある。在来系の冑に金銅装を施すことは少なかつたと考えられるため、古墳時代の冑を研究する上で、極めて重要な資料であるといえることができる。



右側面



左側面



正面



背面



背面 歩揺を取り付けた針金の残存状況



左側面 胴巻板の文様

87 仁徳天皇大仙陵石郭ノ中ヨリ出シ甲冑之図

一点(書陵部)

紙本彩色 縦二七・三×横一七七・七

明治時代

明治五年(一八七二)に仁徳天皇陵の前方部において埋葬施設が露出した際に発見された出土品を描いた絵図である。原本とされるものは現在、個人蔵となっており、堺市博物館において保管されているが、ここで紹介するのはその写し、もしくは控えと考えられるものである。

古墳時代の甲冑は、鉄製が大半であるものの、ここに描かれた甲冑(眉庇付冑と短甲^{たかあ}…日本在来と考えられる甲^{かぶ})は金銅装のものであり、非常に貴重なものである。なお、この出土品は現地に再埋納されており、現在は確認することができないため、出土品の実態を把握するうえで非常に重要な絵図といえることができる。

この絵図については、現場にいたことが確実で、石棺の絵図も残している柏木貨一郎(探古、政矩)によるものであることがこれまでも推測されてきたが、『蜷川式胤追慕録』における記載から判断して、柏木貨一郎によるものであることが確実といえる。

なお、本資料は透写されたものとはいえ、その彩色や字形などが原本と比較して遜色がないものであり、原本作成時に同一の絵図が複数描かれたうちのひとつといえるかもしれない。

〔識別番号四二〇二〇〕

IV 守り伝えられたもの

いつの時代も、当時の人々の「現在」から見て古い時代の遺物は、興味の対象になつたと考えられます。現代のように学問の体系や保存の制度は整備されていなかったものの、古代の遺物が「大切なもの」であるという意識は、それぞれの時代の文化の中で息づいてきたと思われれます。それによって、古くに出土した遺物が大切に現在まで保存されてきました。ここでは、保存のための箱をしつらえて守ってきた、古代の造形について紹介します。





出土地不明

重箱…木製漆塗 資料…石製・青銅製・金銅製

重箱…江戸時代

資料…縄文・古墳時代、中国 戦国・前漢・唐

花柄で飾られた二組十段の重箱の中に、各種の考古品が納められている。上から一〜十段の順序で、各段に収められている出品資料の概要を述べていきたい。なお、ほとんどの資料は敷板に綴じ付けられている。

一段目(84頁)には、石鏃が納められている(右下にある最大の資料長さ二・三九センチ)。出品番号2でも示したように、矢柄に取り付けるための突起があるものとなないものがある。一部に欠けたものも見られるが、ほぼ完形のものが集められて、箱内いっぱいきれいに並べられている。84頁の解説のとおり、石器の中でも石鏃が注目される存在であったことがうかがえる。

二段目(85頁)には、遊離した状態の勾玉三点(最長五・一七センチ)、筒形銅器一点(長二・一センチ)と耳環二点が納められている。この中でも筒形銅器は注目される。同種の資料は古墳時代の前半代を中心にみられるものであり、棺などの武器の石突(柄の地面に接する側の端部に取り付けた金具)と考えられている。

現在の古墳研究から見ると重要な一例であるが、収集の際には、透孔をもつ古銅器として、造形上の特徴が好まれたと考えられる。

三段目(85頁)には、勾玉一〇点と素玉一点(写真上から三段目右)が納められている(勾玉 最長二・九四センチ)。

いずれも、濃緑色の翡翠を使用したと考えられる。勾玉などが出土するのは副葬品であることが多く、墓の造られた時期にもよるが、出品番号22〜29のように多様な石材が用いられることが多かった。箱内の勾玉・素玉を見る限り、選択的に色味のきれいな緑色の玉が収集されたとも考えられる。

四段目(86頁)には、勾玉八点(最長五・七五センチ)が納められている。三段目と同じく玉のみで構成されている。使用されている石材は翡翠と考えられ、三段目と同様に、収集にあたって使用されている石材に選択が働いているように見える。

また、四段目の勾玉は、三段目の玉と比較して明らかに大型のものがまとめられており、重箱内での配置に際して、ある程度の分別が行われていたことを推測させる。

五段目(86頁)には、勾玉六点と銅鏃一点(長六・五二センチ)が納められている。銅鏃を中心に配して、その周囲を六点の勾玉で囲むような配置となっている。勾玉は、三、四段目とは異なり、緑色の石材のほか、瑪瑙など異なる色合いの石材を使用したものが含まれている。形態もややいびつなものも含まれており、配置する際には、箱を違えることで、緑色で精美な形のものとは区別したと考えられる。

銅鏃は、柳の葉の形に似ていることから、「柳葉形」と呼ばれる。鏃は、弥生時代以降銅製・鉄製が現れるが、五段目に収められた資料は、古墳時代の銅鏃として比較的多く出土している形態のものである。

六段目(86頁)には、三環鈴(三つの鈴を環でつないだもの)一点(右上)、勾玉一点(右下)、鍬形石一点(左 長さ一六・九センチ)が納められている。三環鈴は、青銅製の铸造品で、馬具を構成する品目である。日本で出土する資料の中でも、初期の特徴を備えており、古墳出土の馬具研究の上では重要な資料といえる。収集の際には、二段目の筒形銅器と同様に、鈴として音の出る珍しい造形の古銅器として注目されたのであろう。

鍬形石は、これまでの研究から、もつとも新しく製作されたもののひとつであると考えられる。類例が少なく、今後の研究が俟たれる資料といえる。

七段目(87頁)には、鹿龍文鏡一点(径一〇・八センチ)が納められている。中国・前漢時代(紀元前二〇六

〜八年)に製作された鏡である。縁の断面は平らで、銘文はみられない。四つの乳の間に、逆S字形の文様を配している。これまでの研究から、同種の鏡の中でも、比較的古い段階に製作されたものと考えられる。

八段目(87頁)には、宝相華文八稜鏡一点(径一四・八センチ)が納められている。中国・唐時代(六一八〜九〇七年)に製作された鏡である。蔓に花びらや葉が絡んだような文様が集まり、放射状に配置されることで、大きな花の形にみえる文様が特徴である。

九段目(88頁)には、連弧文鏡一点(径一五・八センチ)が納められている。中国・前漢時代(紀元前二〇六〜八年)に製作された鏡である。小さな円弧の単位を円形に連続させた文様をもつ。本資料や先の鹿龍文鏡(87頁)など前漢代の鏡は、日本の弥生時代、特に北部九州地域で多く出土しており、遺跡の実年代を考える上で重要な資料とされる。

十段目(88頁)には、管玉一五点(右上)、銅鈴二点(右下)、銅戈一点(長二・二センチ)が納められている。管玉は、碧玉製である。銅鈴は、馬具の一品目である馬鈴の可能性が高い。同形同大で赤色顔料が付着しているなど、同じ遺跡から出土したものと推測される。保存状態がよく音が鳴る器物である点は、三環鈴などと同様の古銅器としての注意を引いたと考えられる。銅戈は、中国・戦国時代(紀元前四〇三〜紀元前二二一年)に盛んに製作された武器である。重箱の中では、もつとも製作時期が古いと考えられる。

全体を見てわかるように、玉をはじめとする石製の資料への興味が強いことと同時に、青銅器への注目も高いものがあつたことがわかる。その中には、石製品としては鍬形石、銅製品としては筒形銅器や三環鈴など、個別の考古資料としてみた場合でも、類例が少ないなど重要な資料が含まれていることが、本品のひとつの特徴といえるだろう。



1段目：石鏃

古器物へのまなざし

大雨がとおりすぎた直後の晴天の日が、石器や土器などの遺物を採集するのに適していることは、考古学を志したものであれば誰もが知っていることであろう。そして、それは雨に洗われることによって土中に埋没していた遺物が露出した結果であることもあわせて知られていることである。

雷雨のあとに遺物が見つかることは古くから意識されていたようで、出羽国の国司が石鏃の発見について政府へ報告したことが、『続日本後紀』の承和六年(八三九)や『三代実録』の貞観十年(八六八)、仁和元年(八八五)、仁和二年(八八六)の記事などで知られている。これらの記録は、蝦夷の南下にともなう北方情勢の不安定化といった政治的な要素を多分にふくむもので、単に考古学史上のできごとというだけではない。しかし、それらの記録から判断するかぎり、古代の人々が雷雨の際に石鏃が空から降ったものとして認識していたという事実には間違いはなく、その要因として天上における「神軍」すなわち神々の戦闘によって矢が落下したものと考えられていたようである。このように、石鏃が空から降ってくることに對して何らかの知的好奇心や神秘性を抱いていたことが推測される。

時をへて近世段階になると、石鏃が空から降ってきたものではなく、土中に埋蔵されていたものが雨によって洗い出されたものとみる説もでてくる。また、この頃には好古家ともいわれられるような蒐集家も各地にみられるようになる。

今回の展示において紹介した重箱に収められた資料群も、おそらく近世段階に形成されたものと考えられるが、その背景には古くから古器物に對してむけられていた畏怖の念や神秘性、珍奇なものに對する知的好奇心、近世段階の日本列島内に萌芽していた学術的関心とがあいまった結果と考えるべきである。

(書陵部陵墓課・加藤一郎)



2段目に納められている勾玉



2段目：筒形銅器と耳環



3段目：勾玉と棗玉



4段目：勾玉



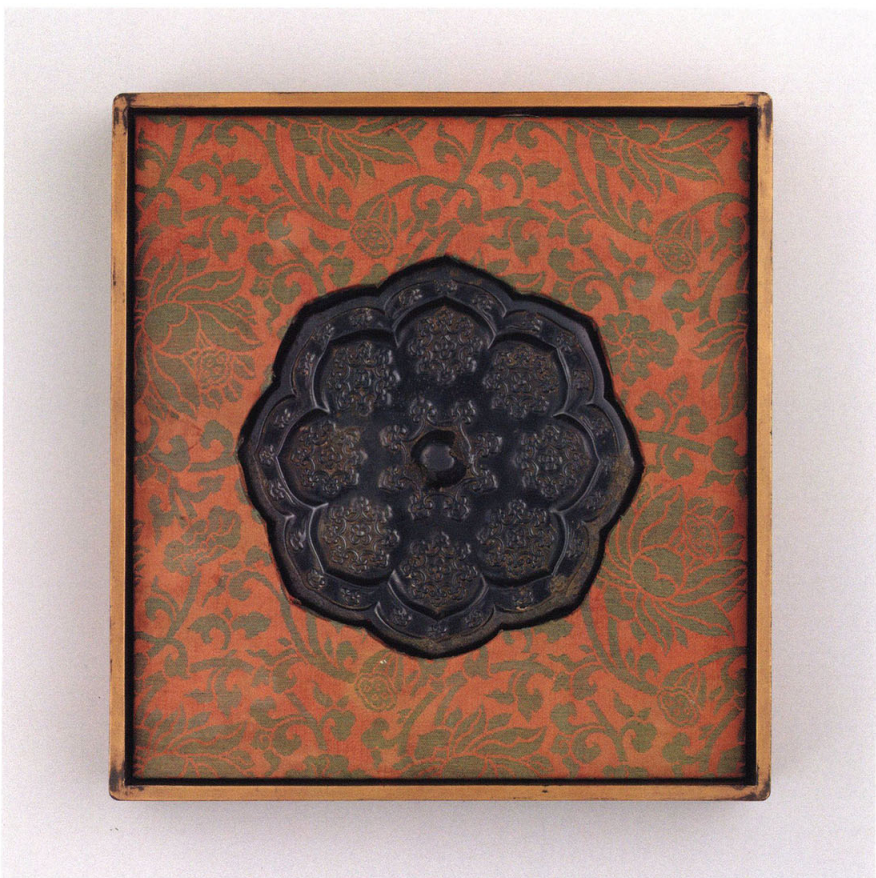
6段目：楯形石、三環鈴、勾玉



5段目：銅鏃と勾玉



7段目：虺龍文鏡



8段目：宝相華文八稜鏡



9段目：連弧文鏡



10段目：銅戈、管玉、銅鈴

三の丸尚蔵館の考古品

三の丸尚蔵館が考古品を所蔵していることを知る人は少ないかもしれない。それらはいずれも明治期の御買上あるいは献上により皇室に収蔵されたものである。本展ではそのうち五件の資料を紹介しているが、それぞれ作品自体の歴史的価値のみならず、伝来や付属する収納箱にも注目すべき点がある。

「金銅製四鍔壺」(出品番号74)は、明治十一年(一八七八)に堺県高市郡和田村古宮(現在の奈良県明日香村)の水田で発見され、堺県令税所篤から内務卿伊藤博文に報告されると、検査のため東京へ送られた。発見者は買い取りを希望したが、内務省博物館では高額のため買い取ることができず、宮内省買上げとなり御物となった。その後、昭和十一年に東京帝室博物館の奈良時代出土品展覧会へ出品されるまで注目されることはなかったが、同展以後、古代の優品として考古学界を賑わせてきた。一方、本展が初公開となる「金銅装横板鍔留衝角付冑」(出品番号86)は、明治二十二年に内蔵頭兼皇居御造営事務局長であった杉孫七郎より、前年に落成した明治宮殿への御移転を奉祝して明治天皇へ献上された。ガラス入りのケースが付属しており、明治宮殿の装飾としても使用されていたようだ。宮内省の要職を歴任した杉孫七郎は、文久元年(一八六〇)の遣欧使節の一員でロンドン万国博覧会や大英博物館を見学している。そのときに培われた古器旧物に対する知見が、



(図1) 出品番号60の鏡箱蓋表



(図2) 出品番号60の鏡箱蓋裏



(図3) 出品番号69の鏡箱蓋表

のちに正倉院御物整理掛長として正倉院御物の保存にも役立てられるなど、宮内省における文化行政の面でも重要な人物である。

「飛禽走獸文鏡」(出品番号60)は土佐藩最後の藩主となった山内豊範より明治八年に買い上げられた。古銅器に造詣の深かった先代山内容堂の遺愛の品の一つである。本品には黒漆塗の鏡箱のほか、梨子地高蒔絵(江戸時代、十八世紀頃)の鏡箱が付属する。この蓋表に鳳凰、蓋裏に桐樹を高蒔絵、螺鈿、平文で表した鏡箱(図1、2)は、本品を納める桐箱の墨書から、銅鏡本体とは別に明治二十二年に宮内省図書属の堀博から献上されたものであることがわかる。堀は前述した杉孫七郎とともに正倉院御物整理掛に任命されたメンバーの一人でもあった。「瑞獸鏡」(出品番号69)も黒漆塗に朱漆絵で蓋表に鶴亀に松竹を描いた鏡箱(室町時代、十五世紀頃)を伴う(図3)。いずれも江戸時代以前にさかのぼる銅鏡の収納の様子を伝えるものである。これらの鏡箱の存在は、学術的な考古資料という意味を超えて、鏡そのものが永く大切にされてきた歴史を物語っている。

そうしたモノの歴史を伝えるという意味で、じつに興味深いのが「発掘品類集 蒔絵重箱入」(出品番号88)だ。明治十八年の御買上と伝えられるのみで、それ以前の個々の資料の蒐集経緯は不明であるが、有職文様を意識した蜀紅文風に菱花形を繋ぐ

文様を蒔絵で表わした、十段重ねの重箱はこれで一つの総合的なコレクションを構成している。銅鏡を納めた三段には、鏡の大きさや形状に合わせて窪みをつけた各段の敷板に、それぞれ色と文様の異なる錦が貼り込まれており、このコレクションの創造者の美意識を伝えている。このように考古学の観点とは別のところに面白さを見つめることができるのも、三の丸尚蔵館の考古品の特徴である。

89 筒形石製品

二点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)
 緑色凝灰岩製 長五・三(右)

90 勾玉

五点(書陵部)

奈良県北葛城郡河合町 佐味田宝塚古墳
 硬玉製 長二・五(左端)

91 鏃形石製品

三点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 大塚陵墓参考地(新山古墳)
 緑色凝灰岩製 長七・二(左端)

92 銅鏃

二点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 黒石山古墳
 銅製 長五・〇(右)
 以上 古墳時代

〔発掘品類集(時絵重箱入)〕(出品番号88)と関連する書陵部所蔵資料を紹介しておきたい。

出品番号89は筒形石製品である。重箱二段目の筒形銅器に類する資料で、石突のような性格が考えられているが、単純に筒形銅器を石に写し取ったものかどうかは、検討の余地がある。

出品番号90は、勾玉である。重箱三段目の比較的小型の勾玉に類するものである。

出品番号91は鏃形石製品である。重箱五段目の銅鏃の形態を、石で写し取ったものである。古墳時代に作られた金属製の鏃を写し取った儀礼用のものであり、弥生時代以前の石鏃とは異なるものである。

出品番号92は、銅鏃である。重箱五段目の銅鏃とは少し形態が異なる。金属製の鏃ではあるが、銅鏃自体が儀礼用の道具であった可能性も考えられている。

〔89…官四六、90…陵一四二、91…官四四、92…官四二〕

93 鍬形石

二点(書陵部)

奈良県北葛城郡広陵町 伝 菓山古墳
 緑色凝灰岩製 長一四・〇(下)
 古墳時代

94 宝相華文八花鏡

一点(書陵部)

愛知県西尾市西幡豆後田遺跡
 青銅製 長一七・六
 奈良時代

95 銅鈴

二点(書陵部)

静岡県周智郡森町 石仏ノ坪古墳
 青銅製 径五・五(右)
 古墳時代

出品番号93は、鍬形石である。上下の破片は似ているが、別の個体である。全面に筋状に彫り込んだ装飾が施されている。重箱六段目の鍬形石も部分的に筋状の装飾が施されており、下端部の中央には細かい扇状の刳り込みがある点も共通している。これらの鍬形石が同じデザインを取り込みながら製作されたことがわかる。

出品番号94は、宝相華文八花鏡である。重箱八段目の鏡と同種の文様であるが、全体の構成は異なっている。外縁が花びらのようになっていた点も同じであるが、重箱八段目の鏡は、先端が尖っているために「八稜鏡」、本出品資料は丸いため「八花鏡」と呼ばれる。

出品番号95は、銅鈴である。右の個体は、鈴の中央に二本の帯が廻っており、重箱十段目の銅鈴とよく似ている。比較的大きな鈴であり、馬鈴と考えられる。
 [93:官八九、94:陵六四一、95:陵八九]

出品目録

平成二十九年九月二十三日(土・祝)～十二月十日(日)
 前期・九月二十三日(土・祝)～十月二十九日(日)
 後期・十一月三日(金・祝)～十二月十日(日)

出品番号	名称	出土地	点数	製作時期	所管	展示期間
1	削器	北海道・ニセコ町	一点	縄文～続縄文時代	書陵部	全期間
2	石鏃	出土地不明	六点	縄文時代	書陵部	全期間
3	石槍	出土地不明	一点	縄文時代	書陵部	全期間
4	磨製石斧	石川・穴水、新潟・鹿伏ほか	二六点	縄文時代	書陵部	全期間
5	御物石器	石川・穴水町	二点	縄文時代	書陵部	全期間
6	鍬形石	奈良・伝 栗山古墳	一点	古墳時代	書陵部	前期
7	鍬形石	奈良・大塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
8	鍬形石	奈良・伝 栗山古墳	一点	古墳時代	書陵部	後期
9	車輪石	新潟・鹿伏山	一点	古墳時代	書陵部	全期間
10	車輪石	奈良・伝 栗山古墳	一点	古墳時代	書陵部	前期
11	車輪石	奈良・大塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	後期
12	石釧	奈良・大塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
13	石釧	栃木・西町屋	一点	古墳時代	書陵部	後期
14	剣形石製品	新潟・鹿伏山	一点	古墳時代か	書陵部	全期間
15	剣形石製品	三重・石山古墳	一点	古墳時代	書陵部	全期間
16	石製模造品(刀子形・鎌形)	群馬・高崎第一号墳	一〇点	古墳時代	書陵部	前期
17	石製模造品(斧形・鎌形)	奈良・宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号	七点	古墳時代	書陵部	後期
18	石製模造品(剣形・有孔円板・勾玉形)	奈良・大和四号墳	一三点	古墳時代	書陵部	後期
19	石製模造品(剣形・有孔円板)	茨城・八重	一点	古墳時代	書陵部	前期
20	子持勾玉	出土地不明	一点	古墳時代	書陵部	全期間
21	勾玉・管玉	山口・山陽小野田市厚狭	三点	弥生時代か	書陵部	後期
22	勾玉・管玉ほか玉類(丸玉)	奈良・黒石山古墳	一〇一点	古墳時代	書陵部	後期
23	大管玉・管玉	奈良・大塚陵墓参考地	二〇点	古墳時代	書陵部	後期
24	勾玉・管玉ほか玉類(棗玉)	奈良・三吉陵墓参考地	七点	古墳時代	書陵部	後期
25	大勾玉・管玉ほか玉類(勾玉・棗玉)	奈良・栗山古墳	九八点	古墳時代	書陵部	前期
26	勾玉・管玉ほか玉類(棗玉・丸玉・白玉・小玉)	大阪・塚廻古墳	一六四七点	古墳時代	書陵部	前期
27	勾玉・管玉ほか玉類(棗玉・丸玉)	福岡・御所山古墳	九五点	古墳時代	書陵部	前期
28	勾玉・管玉ほか玉類(垂玉・丸玉・棗玉・算盤玉)	奈良・小山古墳	五〇点	古墳時代	書陵部	前期
29	勾玉・管玉ほか玉類(丸玉・棗玉・平玉)	熊本・宮穴横穴墓群	二四点	古墳時代	書陵部	後期

土の造形

30	壺形埴輪	奈良・倭迹迹日百襲姫命大市墓	一点	古墳時代	書陵部	前期
31	壺形埴輪	奈良・倭迹迹日百襲姫命大市墓	一点	古墳時代	書陵部	後期
32	鱗付円筒埴輪	奈良・磐園陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
33	円筒埴輪	宮崎・男狭穂塚女狭穂塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
34	朝顔形埴輪	大阪・応神天皇惠我藻伏崗陵	一点	古墳時代	書陵部	後期
35	円筒埴輪	大阪・継体天皇三嶋藍野陵	一点	古墳時代	書陵部	後期
36	鞍形埴輪	大阪・応神天皇惠我藻伏崗陵飛地ほ号	一点	古墳時代	書陵部	全期間
37	人物形埴輪 女子頭部	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	全期間
38	円形埴輪	大阪・百舌鳥陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	全期間
39	家形埴輪	大阪・百舌鳥陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	全期間
40	馬形埴輪 頭部	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	前期
41	馬形埴輪 頭部	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	後期
42	馬形埴輪 鞍部	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	全期間
43	犬形埴輪 頭部	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	全期間
44	須惠器甕	大阪・仁德天皇百舌鳥耳原中陵	一点	古墳時代	書陵部	全期間
45	須惠器杯蓋	出土地不明	一点	古墳時代	書陵部	前期
46	須惠器高杯	出土地不明	一点	古墳時代	書陵部	前期
47	須惠器一括	奈良・御所市	四点	古墳時代(飛鳥時代)	書陵部	後期
48	須惠器壺・器台	出土地不明	一点	古墳時代	書陵部	後期
49	須惠器提瓶	福岡・朝倉郡	一点	古墳時代	書陵部	前期
50	須惠器・土師器一括	京都・入道塚陵墓参考地	九点	古墳時代(飛鳥時代)	書陵部	前期
51	須惠器・土師器一括	京都・円山陵墓参考地	五点	古墳時代(飛鳥時代)	書陵部	後期
52	須惠器一括	京都・泉山陵墓地飛地い号	八点	古墳時代(飛鳥時代)	書陵部	後期
53	須惠器壺	出土地不明(福岡もしくは東京)	一点	古墳時代(飛鳥時代)	書陵部	後期
54	須惠器壺・壺蓋	奈良・大和四号墳	一点	奈良時代	書陵部	後期
55	須惠器裝飾(人物像)	愛媛・今治市	二点	古墳時代	書陵部	全期間
金属の造形						
56	流水文銅鐸(一号)	奈良・天理市	一点	弥生時代	書陵部	前期
57	流水文銅鐸(二号)	奈良・天理市	一点	弥生時代	書陵部	後期
58	銅矛	愛媛・四国中央市	一点	弥生時代	書陵部	全期間
59	画文帯環状乳神獸鏡	奈良・大塚陵墓参考地	一点	中国 後漢	書陵部	前期
60	飛禽走獸文鏡	出土地不明	一点	中国 魏	三の丸尚蔵館	全期間
61	三角縁龍虎鏡	群馬・北山茶臼山古墳	一点	中国 魏	書陵部	全期間

62	三角縁三神二獸博山炉鏡	奈良・佐味田貝吹古墳	一点	中国 魏	書陵部	後期
63	三角縁三神三獸鏡	奈良・大塚陵墓参考地	一点	中国 魏か	書陵部	前期
64	方格規矩四神倭鏡	奈良・大塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
65	直弧文鏡	奈良・大塚陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	全期間
66	神人車馬画像倭鏡	奈良・佐味田宝塚古墳	一点	古墳時代	書陵部	後期
67	家屋文鏡	奈良・佐味田宝塚古墳	一点	古墳時代	書陵部	後期
68	旋回式獸像鏡	滋賀・垣籠古墳	一点	古墳時代	書陵部	前期
69	瑞獸鏡	出土地不明	一点	中国 宋	三の丸尚蔵館	後期
70	馬形帶鉤・環	岡山・神山古墳	七点	朝鮮半島 三国時代	書陵部	後期
71	馬鐸	愛媛・妻鳥陵墓参考地	二点	古墳時代	書陵部	前期
72	双龍環頭把頭	群馬・二ツ山古墳	一点	古墳時代	書陵部	前期
73	單鳳環頭把頭	京都・円山陵墓参考地	二点	古墳時代	書陵部	後期
74	金銅製四環壺	奈良・古宮遺跡	一点	飛鳥〜奈良時代	三の丸尚蔵館	全期間
75	龍文透彫帶金具	奈良・大塚陵墓参考地	一四点	中国 晋	書陵部	前期
76	冠	愛媛・妻鳥陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	後期
77	鳥形飾板	長野・有明古墳群	二点	古墳時代	書陵部	前期
78	垂飾付耳飾	福井・西塚古墳	二点	古墳時代	書陵部	全期間
79	耳環	奈良・小山古墳	二点	古墳時代	書陵部	全期間
80	耳環	兵庫・玉津陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	全期間
81	耳環	愛媛・波賀部大塚古墳	一点	古墳時代	書陵部	全期間
82	大鉄鋌	奈良・宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号	一一点	古墳時代	書陵部	全期間
83	小鉄鋌	奈良・宇和奈辺陵墓参考地旧陪冢ろ号	一〇点	古墳時代	書陵部	全期間
84	小札鋌留衝角付冑	福井・西塚古墳	一点	古墳時代	書陵部	後期
85	横矧板鋌留衝角付冑	愛媛・妻鳥陵墓参考地	一点	古墳時代	書陵部	前期
86	金銅装横矧板鋌留衝角付冑	出土地不明	一点	古墳時代	三の丸尚蔵館	全期間
87	仁徳天皇大仙陵石郭ノ中ヨリ出シ甲冑之図	出土地不明	一点	明治時代	書陵部	全期間
守り伝えられたもの						
88	発掘品類集(蒔絵重箱入)	出土地不明	一組	古墳時代ほか	三の丸尚蔵館	全期間※
89	筒形石製品	奈良・大塚陵墓参考地	二点	古墳時代	書陵部	前期
90	勾玉	奈良・佐味田宝塚古墳	五点	古墳時代	書陵部	前期
91	鏃形石製品	奈良・大塚陵墓参考地	三点	古墳時代	書陵部	前期
92	銅鏃	奈良・黒石山古墳	二点	古墳時代	書陵部	前期
93	鍬形石	奈良・伝 栗山古墳	二点	古墳時代	書陵部	後期
94	宝相華文八花鏡	愛知・後田遺跡	一点	奈良時代	書陵部	後期
95	銅鈴	静岡・石仏ノ坪古墳	二点	古墳時代	書陵部	後期

※前期・後期で展示替えを予定

古代の造形——モノづくり日本の原点

三の丸尚蔵館展覧会図録No.78

編集 宮内庁書陵部

宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十九年九月二十三日発行

© 2017, The Archives and Mausolea Department
The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shōzōkan
Imperial Household Agency

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

古代の造形——モノづくり日本の原点

三の丸尚蔵館展覧会図録No.78

編集 宮内庁書陵部

宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十九年九月二十三日発行

© 2017, The Archives and Mausolea Department
The Museum of the Imperial Collections, Sanmonnan Shōzōkan
Imperial Household Agency

- 65
Mirror decorated with straight line and arc pattern
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 66
Japanese mirror with abstract design of deities, humans, carriage, and horses
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 67
Mirror with four buildings
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 68
Mirror with abstract design of circling beasts
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 69
Mirror decorated with images of beasts bringing happiness
1 piece
Song dynasty, China
960 - 1279
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
- 70
Horse-shaped belt buckles, ring
7 pieces
Three Kingdoms period, Korean Peninsula
4th century - 7th century
Archives and Mausolea Department
- 71
Harness suspension bells
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 72
Pommel with two dragons motif
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 73
Pommels with phoenix motif
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 74
Gilt bronze vase with four rings
1 piece
Asuka to Nara periods
mid 7th century to 784
The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
- 75
Gilt bronze belt fittings
14 pieces
- Jin dynasty, China
265 - 420
Archives and Mausolea Department
- 76
Crown
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 77
Bird-shaped gilt bronze plates
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 78
Gold earrings with pendant
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 79
Earrings
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 80
Earring
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 81
Earring
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 82
Large flat iron ingots
11 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 83
Small flat iron ingots
10 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 84
Visorless keeled helmet made of scale iron strips riveted together
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 85
Visorless keeled helmet made of horizontal iron strips riveted together
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 86
Visorless keeled helmet made of gilt bronze layer applied to horizontal iron strips riveted together
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
- 87
Illustration of objects excavated from front area of mausoleum of Emperor Nintoku
1 piece
Meiji period
1872 - 1912
Archives and Mausolea Department
- Objects Preserved and Passed Down**
- 88
Excavated material in a *jubako* (multi-tiered box) with *makie*
1 set
Kofun period and other periods
mid 3rd century - mid 7th century and other periods
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan
- 89
Cylindrical stone objects
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 90
Comma-shaped beads
5 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 91
Stone replicas of arrowheads
3 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 92
Bronze arrowheads
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 93
Hoe-shaped steatite bracelets
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 94
Mirror with stylized flower motif resembling peonies
1 piece
Nara period
710 - 784
Archives and Mausolea Department
- 95
Bronze bells
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

33
Cylindrical *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

34
Cylindrical *haniwa* with flaring mouth
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

35
Cylindrical *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

36
Quiver-shaped *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

37
Human figurine *haniwa* (female head)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

38
Wall-shaped *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

39
House-shaped *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

40
Horse-shaped *haniwa* (head)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

41
Horse-shaped *haniwa* (head)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

42
Horse-shaped *haniwa* (saddle)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

43
Dog-shaped *haniwa* (head)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century

Archives and Mausolea Department

44
Sue ware (unglazed stoneware) pot
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

45
Sue ware (unglazed stoneware) lid
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

46
Sue ware (unglazed stoneware) pedestaled dish
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

47
Sue ware (unglazed stoneware) hoard
4 pieces
Kofun period (Asuka period)
mid 3rd century - 7th century
Archives and Mausolea Department

48
Sue ware (unglazed stoneware) jar, jar stand
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

49
Sue ware (unglazed stoneware) hanging jug
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

50
Sue ware (unglazed stoneware), *Haji* ware (low fired brown pottery) hoard
9 pieces
Kofun period (Asuka period)
mid 3rd century - 7th century
Archives and Mausolea Department

51
Sue ware (unglazed stoneware), *Haji* ware (low fired brown pottery) hoard
5 pieces
Kofun period (Asuka period)
mid 3rd century - 7th century
Archives and Mausolea Department

52
Sue ware (unglazed stoneware) hoard
8 pieces
Kofun period (Asuka period)
mid 3rd century - 7th century
Archives and Mausolea Department

53
Sue ware (unglazed stoneware) jar
1 piece
Kofun period (Asuka period)
mid 3rd century - 7th century
Archives and Mausolea Department

54
Sue ware (unglazed stoneware) vase with lid
1 piece
Nara period
710 - 784

Archives and Mausolea Department

55
Sue ware (unglazed stoneware) ornaments (human figures)
2 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

Forms of Metal

56
Ritual bell with design of flowing water
1 piece
Yayoi period
10th century BC - mid 3rd century
Archives and Mausolea Department

57
Ritual bell with design of flowing water
1 piece
Yayoi period
10th century BC - mid 3rd century
Archives and Mausolea Department

58
Socketed bronze spearhead
1 piece
Yayoi period
10th century BC - mid 3rd century
Archives and Mausolea Department

59
Deity-and-beast mirror with an image band
1 piece
Later Han Dynasty, China
25 - 220
Archives and Mausolea Department

60
Mirror decorated with images of animals and birds
1 piece
Wei Dynasty, China
220 - 265
Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

61
Triangular-rimmed mirror, decorated with dragons and tigers
1 piece
Wei Dynasty, China
220 - 265
Archives and Mausolea Department

62
Triangular-rimmed mirror, decorated with images of immortals and beasts
1 piece
Wei Dynasty, China
220 - 265
Archives and Mausolea Department

63
Triangular-rimmed mirror, decorated with images of immortals and beasts
1 piece
probably Wei Dynasty, China
probably 220 - 265
Archives and Mausolea Department

64
Japanese TLV mirror with the four deities
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department

List of Exhibits

Forms of Stone

- 1
Side scraper
1 piece
Jōmon to post-Jōmon periods
130th century BC - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 2
Stone arrowheads
6 pieces
Jōmon period
130th century BC - 10th century BC
Archives and Mausolea Department
- 3
Stone spear head
1 piece
Jōmon period
130th century BC - 10th century BC
Archives and Mausolea Department
- 4
Polished stone axes
26 pieces
Jōmon period
130th century BC - 10th century BC
Archives and Mausolea Department
- 5
Gyobutsu Sekki, carved, polished stone bars,
function unknown
2 pieces
Jōmon period
130th century BC - 10th century BC
Archives and Mausolea Department
- 6
Hoe-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 7
Hoe-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 8
Hoe-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 9
Wheel-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 10
Wheel-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 11
Wheel-shaped steatite bracelet
1 piece
- Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 12
Ring-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 13
Ring-shaped steatite bracelet
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 14
Stone replica of a sword
1 piece
probably Kofun period
probably mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 15
Stone replica of a sword
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 16
Soft stone imitative articles (knives, sickle)
10 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 17
Soft stone imitative articles (adze, sickles)
7 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 18
Soft stone imitative articles (sword, perforated
discs, comma-shaped bead)
13 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 19
Soft stone imitative articles (swords, perforated
discs)
11 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 20
Compound *magatama* (comma-shaped bead)
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 21
Comma-shaped bead, cylindrical beads
3 pieces
probably Yayoi period
probably 10th century BC - mid 3rd century
Archives and Mausolea Department
- 22
Comma-shaped beads, cylindrical beads and
other precious stones
101 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 23
Large cylindrical bead, cylindrical beads
20 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 24
Comma-shaped bead, cylindrical beads and
other precious stones
7 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 25
Large comma-shaped bead, cylindrical beads
and other precious stones
98 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 26
Comma-shaped beads, cylindrical bead and
other precious stones
1647 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 27
Comma-shaped beads, cylindrical beads and
other precious stones
95 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 28
Comma-shaped beads, cylindrical beads and
other precious stones
50 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 29
Comma-shaped beads, cylindrical beads and
other precious stones
24 pieces
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- ## Forms of Clay
- 30
Jar-shaped *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 31
Jar-shaped *haniwa*
1 piece
Kofun period
mid 3rd century - mid 7th century
Archives and Mausolea Department
- 32
Cylindrical *haniwa* with two fins attached
1 piece

Foreword

The Imperial Household Agency has a Mausolea and Tombs Division within the Archives and Mausolea Department, which is responsible for matters pertaining to the maintenance, investigation and study of the Imperial Mausolea and Tombs, such as of the successive Emperors and Empresses. This division possesses many superior artifacts such as the *Female Head* and *Horse-Shaped Haniwa* (clay figure) excavated from the mausoleum of Emperor Nintoku. Among them are various examples of superior ancient forms, such as the *Gyobutsu Sekki* (stone tools among the Imperial Treasures) with its unique form, the *Ritual bell with design of flowing water*, with beautiful and stylish flowing water patterns, and the *Mirror with four buildings* which is a traditional mirror with a three dimensional Japanese house of the time added as an original touch. These are important works of the fundamental period of Japanese culture, showing the brilliant expressions in forms during the ancient eras. The Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shozokan, which has succeeded the works past down as *Gyobutsu* (Imperial Treasures) until the era of Emperor Showa, possesses noteworthy pieces such as the *Gilt bronze vase with four rings* which is academically evaluated as important research material, and the *Visorless keeled helmet made of gilt bronze layer applied to horizontal iron strips riveted together*, of which there is no other similar example.

In this exhibition, we will introduce the pieces which retain their shapes since the era that they were used, focusing on their characteristics in form, with attention on materials such as stone, clay and metal, and their manufacturing techniques, among the archeological pieces within the collection of the Mausolea and Tombs Division and the Museum of Imperial Collections, Sannomaru Shozokan.

The “forms of stone” include beautiful green Jade *magatama* (comma-shaped beads), marvelous shaped *kurwagata-ishi* (hoe-shaped stones) and *sharin-seki* (wheel-shaped stones) which show the features of a bracelet using shells from southern oceans. The “forms of clay” include *haniwa* (clay figures) which convey the magnanimous spirit of the ancient times, and *Sue ware* (unglazed vessels) which were skillfully created using a potter’s wheel. The “forms of metal” include bronze mirrors with leaping divine animals and complicated geometrical patterns, and personal adornments in shining gold. All of these show the prolific aesthetic sense and formative ability of the ancient Japanese people. We hope our visitors will take notice in the layers of history within Japanese culture, which has taken pride in its tradition of manufacturing, through the beauty of form created by the materials and techniques used in these objects on display.

September, 2017

The Archives and Mausolea Department
The Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shōzōkan
Imperial Household Agency